

ヴェルターにみる若きゲ-テの悲劇のモチーフ

溝 井 高 志

目 次

- 一 はじめに
- 二 ヴェルターの自殺のモチーフについて
- 三 情熱の運命
- 四 悲劇のモチーフとしての「不幸なる情熱」
- 五 結 び

一 はじめに

『ヴェルター』が悲劇であることはまぎれもない事実である。しかし単純に悲劇であるようにみえて、そのモチーフは必ずしも鮮明でもないし、単純でもない。その最も単純な誤解は『若きヴェルターの悩み (Die Leiden des jungen Werther)』を一つの失恋の悲劇とみることである。しかし、その誤解によってこの小説は広く世界に知られることになり、一大センセーションをまきおこすものとなった。グンドルフ (Friedrich Gundolf) 曰く、「ヴェルターは本質的に悲劇的な結びをもった典型的な不幸な恋の物語であるという、この素材的誤解が確かにこの書にあのものですごい成功を得させたのである。」¹⁾ R・フリーデントール (Richard Friedenthal) 曰く、「その成功は、その詩的内容に負うところほんの一部であって、多くの名声がつねにそうであるように、むしろそれは多く誤解に負うところのものであった。」²⁾

とはいえ、この小説はその結びが自殺という悲劇的結末を必要としているように、悲劇であることは間違いない。後年のゲーテがヴェルターに関して「あれは私がペリカンのように私自身の心臓の血で養い育てたものだ。」³⁾ と言っているように、それは当時のゲーテの苦悩、癒やし難い内面の焦燥、圧迫から吹き出してきたものであることはまちがいない。当時の心境について又、ゲーテは後年ツェルター (Karl Friedrich Zelter) に宛てて書いている、「こういう奇妙にして不自然な、それとともに自然な病気のあらゆる徴候がかつて私の内奥をも荒れ狂ったことは、ヴェルターが何人をも疑わしめないであろう」⁴⁾ と。

しかし、この小説の素材となった背景としてのシャルロッテ・ブッフ (Charlotte Buff) とのゲーテの現実の恋は一つの牧歌・田園詩であった。茅野蕭々氏は、「ゲョエテのヴェツラアに於ける短い滞在は、彼にとっては苦しいと共にまた愉快なものであったに相違ない」⁵⁾ と言っている。或

いは又、「ケストナー（ロッテの婚約者）とロッテと共に、時にはケストナーぬきでロッテとともに、夏が過ぎていく。それはまぎれもないドイツ的な牧歌（eine echt deutsche Idylle）、実り豊かな大地が散文を、純粋な愛着が詩を生み出して出来た牧歌である」⁶⁾と R. フリーデントールはその間の事情を美しく表現している。ヴェルターが友人ヴィルヘルムに宛てた手紙において

さようなら！ それにしても素晴らしい夏だ。ぼくはよくロッテの果樹園の木に登って、実を取るための長い棒で、梨の実を梢から摘み取る。それをぼくが彼女の方へ落とすと、彼女は下にいて、それを拾いあつめるのだ⁷⁾。

と報告している文章に、ゲ-テの現実のロッテとの、いささか感傷を交えながらもほろ苦く、又愉快な夏の思い出の余韻がある。この牧歌のトーンが『ヴェルター』第一部の大きな魅力となっている。季節の移り変りと共に醸し出される情趣の移り変りの中で、若いゲ-テが謳歌したふくいくたる青春の香りを感じさせる。

小説のアルベルトのモデルであるシャルロッテ・ブッフの婚約者ケストナーも特にロッテを独占することなく、ゲ-テとロッテの交わりを小説のアルベルト以上に寛容に受けとめ、ゲ-テとの友情・信頼関係を維持する。恋愛を間にはさみながらも維持されたゲ-テとケストナーの信頼関係、ロッテをめぐるそこなわれることのなかった二人の友情関係は、ヴェルターの

ヴィルヘルム、我々が散歩して、互いにロッテのことを語りあっているのを我々の口から聞くことは一つの喜びであろう。この我々の関係以上にお可笑なものはこの世には存在しない⁸⁾。

と友人ヴィルヘルムにぬけぬけと報告している文章のなかにもよくうかがわれる。或いはこの文章に、当時のゲ-テとロッテ、ケストナーとの牧歌的な関係がよく反映している。ゲ-テもまた愛着の心は感じつつも、決してロッテをケストナーから奪い去り、ロッテを自分のものとしようとはしなかった。又ロッテ自身もゲ-テに対して「神の恩寵豊かな青年は、歓喜してとらえんとするも、奈落に落ちることなくして把ええない一つの星のようなものであるとの予感があったのかも知れない。彼女は心を堅くして揺らぐことがなかった。」⁹⁾しかしそういうお互いの節度の中にも抑え難い愛着があったことは事実であろうし、小説のヴェルターも又次第にその愛着を深め、ロッテを独占したい思いが止み難くなる。

私の眼の前で、彼（アルベルト）がこんなにも多くの完璧な点をもちあわせている彼女を所有するのを見せつけられるのは、耐え難いことであろう¹⁰⁾。

私が彼女の夫に！ ああ主よ、私を創りたまひし主よ、私がかかる至福を享受することを許し給うなら、私の全生涯は祈りの連続となることであろう。私は文句を言うつもりはない。ただ

私にこの涙を許してほしい！ 私のこのはかない願いを許してほしい！ 彼女が私の妻に！ 私がこの世界で一番愛すべき女性をこの腕に抱くことができるなら！ ヴィルヘルムよ、アルベルトが彼女のすらりとした体を抱きしめているのを思うと、全身が震えおののくのだ¹¹⁹。

私が彼女のそばに二時間、三時間と坐り、彼女の姿、彼女の振る舞い、彼女の何とも言えないものの言い様にうっとりしていると、次第に私の五官ははりつめ、私の目の前はまっ暗になり、私はもはや何も聞かなくなり、殺人犯に首をしめつけられたように息ができなくなる¹²⁰。

私は時々わからなくなる。どうして彼女を他の人が愛することができるのか、それが許されるのか。私は全く彼女だけ、こんなにも心から、思いのたけを尽くして愛し、彼女以外には何も知らないし、何もわからないというのに¹²¹。

等々、ヴェルターのやるせない愛着の思いがここかしこにちらべられている。勿論これらの言葉に嘘はないとはいえ、それを現実のゲ-テに当て嵌めて考えてみる場合はいささか斟酌しなければならぬ。特に第二部で、自分の願いと現実との乖離、満たされぬ思い、傷つけられた自尊心、不愉快等々が重なって引き裂かれたヴェルターの胸の中に、アルベルトを殺そうという殺意が浮かぶというくだりにいたっては、「読者はこの 犯罪的気粉れを本当とは信じない¹⁴」とブランデスも言っているように唐突の感は否めない。ゲ-テにそういう殺意が浮んだなどということはとうてい信じられないのは勿論、ヴェルターにとっても不自然な誇張に感じられる。

しかしそういう愛着の思いに苦しみながらも、三人の関係は表面的には何事もなく、平穩裡に過ぎていったが、やがて「状況は時折りいくらか居心地の悪いものになっていく。」¹⁵ ケストナーは時には「私の心に煩悶が生じたこともある。それは一方ではロッテを彼（ゲ-テ）ほどには幸福にしてやれないのではないかと考え、他方では彼女を失いはしないかという考えに堪えられなかったから」¹⁶ というような思いにまでかられるようになる。しかしR・フリーデンタールによれば、ケストナーがこのようにロッテはゲ-テにより適わしいのではないか、ロッテを幸せにできるのは自分ではなくてゲ-テではないかと考えることは、ゲ-テにとって望ましいことではなく、ゲ-テがヴェツラーから立ち去ったのは、ケストナーがその律気な考えをおこしたためであるとR・フリーデンタールは断言している。事実ゲ-テは恋の頂点においてしばしば恋人の許から遁走を企てているのである。ゲ-テほど恋をし、又その恋から遁走を企てた恋人はいないと言っていいたいだろう。「友人ケストナーがもしかして遠慮して身を引いて、彼に道を譲るかもしれないと感じたその瞬間にゲ-テは逃げ出すのである。確かに彼はそれを望んではいない。彼はただ彼女のおもかげを胸に秘めておきたかっただけなのである。」¹⁷ 確かにロッテがケストナーの婚約者であるということが、ロッテとゲ-テの両者に節度をもたせ、その恋愛を急速に破綻に導くことなく、その制約故に、ゲ-テは、常識的にはそれがいかに逆説的に聞こえようとも、十分に思うわずらうことなく恋の体験を満喫し、享受できたということもできよう。しかし、そういう制約の中で恋の思いを満喫

していたゲ-テもその情熱をつのらせ、ついにはロッセから接吻を奪うという仕儀にまで及ぶにいたる。ロッセもゲ-テを叱り、それをケストナーに告げる。事ここに及んで、ついにはケストナーもロッセにゲ-テの熱を冷ますように忠告し、以後ロッセもゲ-テを冷淡にあしらうようになる。或る夜、ゲ-テとケストナーは街を歩きまわり、ゲ-テは二人に冷淡に遇されていることから不機嫌で、あらゆる讒言を口にする。歩きくたびれ、二人は壁にもたれて月の光を浴びて、ついには二人は大いに笑う。状況がきまらずいものになったとは言え、この程度であった。三者の友情は依然としてゆるぎないものであったし、別れても絶えず手紙が交換されている。しかし友人メルクのすすめもあり、恋の戯れも度が過ぎるのを自ら自覚し、ケストナーとロッセの友情に甘えすぎる自分を潔しとせず、しばらくは尚、優柔不断ではあったが、ついにはゲ-テは意を決し、彼らのもとをひそかに立ち去ろうとする。三人が一緒にいた最後の晩、ロッセは偶然にも死後の状態とあの世における再会の話をする。別れを決意していた晩に、そういう話を聞かされたゲ-テは小説『ヴェルター』にもあるように、いたく感動し、彼女の手に接吻して叫ぶ。「僕達は再び会うよ。どんな姿になっても見分けがつくよね。僕は喜んでいく。まあ永遠にということにでもなれば、とても堪えられないよ。ご機嫌よう。ではさようなら。」ゲ-テが立ち去ることを予想しないロッセは「明日ね」と冗談に答える¹⁹⁾。ゲ-テはロッセに宛てて手紙を書く、「僕は 大変 落ち ついて いた。しかし 君達の 話は 僕の 気持を ズタズタに 引き裂いて しまった。僕は 今は、 さようなら と より 以外には 言えない。もう少し 君達の ところに 留まっていたら、 僕には 耐えられ なかったらう。さて 今僕は 一人ぼっち になった。明日は 発つ。おお 哀れな 僕の 頭よ。」¹⁹⁾（筆者傍点）もう少し 長く とどまっていたら、 耐えられ なかった であろう という ゲ-テの 言葉に 偽りは ありまい。ゲ-テなりに 苦渋と 未練の 思い たち 切り 難く、 ヴェツラー を 立ち 去った の であろう。また ロッセ は ゲ-テの 旅立ち を 知って、 ケストナーの前ではらはらと涙を流したという²⁰⁾。

しかしこのヴェツラーでの5月から9月にいたるひと夏の思い出はやはり牧歌であった。それにも拘らず、この思い出から悲劇『若きヴェルターの悩み』が成立する。「如何にゲ-テがヴェツラーに於ける短い夏の夢を生かし切り、これに彼の胸臆に祖来した種々の感情や情緒や思想を加えて、一つの芸術品を作り上げたか、即ち一つの永遠な生命を産み出したかということが、この作に於ての主要な関心事である。……この作は決して単なるゲョエテとロッセとの恋愛物語の記述ではなく、それが骨子又は素材となって出来上った一つの芸術品なのである」²¹⁾（筆者傍点）と茅野蕭々氏も述べておられるように、たとえ第一部にみられる牧歌としての恋愛物語のみずみずしい官能と感性の輝き、生命の高揚がこの小説の主要な魅力を構成しているとはいえ、この恋愛物語に加えられた「種々の感情や情緒や思想」こそが肝要であって、そこにまぎれもなく若いゲ-テが煩悶しつつ「ペリカンのように自身の心臓の血で養い育てた」²²⁾ ところのものが反映している。

もっともこの第一部の生命感情の高揚こそがこの小説の魅力のすべてであって、悲劇的要素は第二義的な意味しかもたないとする説もなくはない。ブランデスは言っている、「ヴェルターは心底では決して女々しい性格ではなく、就中泣き上戸ではない。併し激しい情熱が月並の田園詩に終るならば、詩的興趣を殺ぐであろうから、ゲョエテは悲劇的終末を必要としたのである」²³⁾ と。確か

に第一部がゲーテの体験を下敷にしたものであり、第二部が友人イエルーザレム (Karl Wilhelm Jerusalem) の自殺の報を素材にして書かれたものであるため、第二部には第一部にみられるような素材的には彼自身の直接の体験とみられる要素は少なく、その為、種々の作為が挿入されていることは事実であり、その第二部の作為故にブランドスも『ヴェルター』の真生命は第一部にあると考えたのであろうが、しかし「ゲョエテがこの報(イエルーザレムの自殺の)を聞いて心に深い感動を受けたのは、自らの運命となり得たかも知れないものが、突然自己の周囲に起ったからであった」²⁴⁾ (筆者傍点) ということも事実である。悲劇『ウルフファウスト (Urfaust)』を生み出さずにはおられなかったものと同じ心臓の血がヴェルターにも脈打っている。小栗浩氏も言っておられるように、「この点で興味深いのは、『若いヴェルターの悩み』をめぐる詩と真実である。」²⁵⁾ (筆者傍点) 体験としての真実が一つの詩(文学)を生み出し、詩(文学)を通して又新たな真実が告知される。「詩人とは状態を如実に体験する能力と、体験を如実に表現する能力とである」²⁶⁾ と亀尾英四郎氏は言っておられるが、この直接的な素材としての体験からその時々的心境、内的体験を単純に類推することはできない。内的体験なるものはしばしば直接的な素材としての体験を越えてあるものである。素材としての体験を越えて如実に体験できる能力こそ詩人の能力である。そのような当時の彼の体験なるものが『ヴェルター』の中にどのように告知されているか、『ヴェルター』を通して、当時のゲーテの悲劇のモチーフとなりえたものがどのようなものであったのかを以下において論究してゆきたい。

二 ヴェルターの自殺のモチーフについて

それでは先ず我々はヴェルターのいわゆる自殺のモチーフといわれるものがどういうものであったのかを小説の物語の展開と、この小説の成立の経緯の中から考えてゆきたい。

「ヴェツラーを去ってからだだちに彼の体験を文学作品に仕上げようという強い衝動を彼(ゲーテ)は感じる。しかしその美しい夏の夢を実際そうであったような無邪気で威勢のいい結末で終らせることは詩人としても人間としても納得のいくものではなかった。牧歌というお上品な枠の中に嵌め込むには彼の感情生活は余りにも強く波打っていた。その頃、11月の初めに公使館の書記をしていたイエルーザレムの死を彼は識る。その深味はあるが、しかし憂うつな性格が彼をして自殺にいたらしめたのであった。勿論、人妻への望みなき恋に胸を焦がし、或いはこの世にいや気がさしていたということにもよるのだが……。この瞬間、一挙に彼の作品は現実化するにいたる」²⁷⁾ と、ビールショウスキー (Albert Bielschowsky) はこの小説の成立の経緯について語っている。周知のように、ゲーテ自身のヴェツラーでのロッテとの恋、ラ・ロッシュ夫人の娘マクシミリアーネ・ブレンターノ (Maximiliane Brentano) への思いと、ヴェツラーでの騎士の円卓 (Rittertafel) の仲間イエルーザレムの死がこの小説成立のモチーフの主な素材をなしている。従ってヴェルターにはゲーテ自身とイエルーザレムが、アルベルトにはロッテの婚約者ケストナーとマクシミリアーネ・ブレンターノの夫が、ロッテにはシャルロッテ・ブッフとマクシミリアーネ・ブレンターノ

がモデルとなっていた。とりわけロッテの容姿はマクシミリアーネのそれであり、ゲ-テは作品中のロッテには「青い眼のかわりに漆黒の瞳をもたせたのである。」²⁸⁾ その瞳は「ヴェツラーのひとの主婦らしい青い眼とは違っていた。」²⁹⁾ E. シュタイガー (Emil Staiger) は言っている、「ゲ-テが小説中のロッテにマクシミリアーネの眼を、つまりヴェツラーで彼を見つめたロッテ・ブッフの青い瞳の代りにマクシミリアーネの黒い瞳を与え、二人の輝きを一人の形姿のうちに永遠化しようとした優しい心根はよく知られている」³⁰⁾ と。勿論ロッテの性格は多くシャルロッテ・ブッフのそれであり、「彼女は美しく、気立ては善く、淑やかで、健康で、弱々しい所がない」³¹⁾ 「涙もろい感傷的なようなところは一切なく、活動的で、仕事の大好きな——見るからに爽やかな」³²⁾ 「感じ易いけれども感傷的でない、実行力のある、働くことを喜ぶ性質の娘であった。」³³⁾ ゲ-テ自身彼女について書いている、「あれほど多くの理知があるのにあれほど単純であり、あれほど多くの堅実があるのにあれほど親切であり、それから真実の生活と活動をしつつも、なお魂の安静を持っている」³⁴⁾ と。要する彼女は、健康的で、素朴で、家庭的な女性であるということであって、むしろヴェルターの情熱的な恋の対象としては適わしくない一面があった。かくて、漆黒の瞳のみならず、作品中のロッテにマクシミリアーネの性格が加わることによって、ロッテは「いくらか落ちつきはなくなるが、その分いくらか情熱的になってきている」³⁵⁾。

しかしそのおもかげの多くはあくまでもシャルロッテ・ブッフのそれであり、ヴェルターの感傷癖とロッテの素朴、健康はむしろ好対象であり、それ故に、ヴェルターはロッテの中に自分にはないものを見出し、そこに慰安を見出していたかのようなのである。現実のゲ-テにとってもロッテは又そうであって、「ダルムシュタットの女友達プシヒュエ、リラア、ウラニア等に比較すると、何という対照を示していたであろう。才気横溢な態度、仕事をしないで、熱狂的な感情的空想に耽って、無為に日を送る彼女等と異って、ここには真の健全な感性があり、忠実な義務の遂行があり、人を幸福に感じさせる活動があった。言わばゲ-テは彼自身に最も欠けていたものをロッテに見出したのである。」³⁶⁾ ヴェルターの小説の中で「ヴェルテルのたましいは、ロッテの持つ対蹠性によって自己の健康と成長を求めた。」³⁷⁾ ヴェルターが舞踏会へいく途中、ロッテの家に立ち寄ってロッテを最初に見出す有名なシーン、ロッテが多くの小さな兄弟姉妹に、亡くなった母親に代って、パンを小さく切りさいて分け与え、小さい子等がロッテをとり囲んで、それを嬉々としてうけとり、それをせがむシーンに出くわしてヴェルターが感動するくだり、それはヴェルターが家庭的な側面からロッテに接近していったということであるが、それはロッテとヴェルターの相違、ロッテ固有の魅力を引き立たせて極めて象徴的である。実際にゲ-テ自身はヴェルターに通じる極めて感じ易い一面をもっていたとはいえ、他面において実に素朴、健康であり、ケストナーがゲ-テを評しているように、感情に耽溺する一面と共に、すべての情熱において激しいけれども自分を制御する力があった³⁸⁾。ロッテの素朴と健康さには不安定に揺れ動くゲ-テの心を沈静させる一面があったと共に、又ロッテの素朴・健康がゲ-テのそれと一脈通じるころがあって、それに又、ゲ-テはひかれたともいえるのではあるまいか。従って、E. シュタイガーの曰く、「第一に彼を彼女に惹きつけたのは、現在に忠実たろうとする精神、つまりゲ-テ的な特質である」³⁹⁾ と。

このようにロッテの健康さが強調されることによって、作品の中ではヴェルターの弱さが極立った対照をみせる。しかしこの弱さは多くもう一人のヴェルターのモデル、ゲ-テの友人イエルーザレムのものであった。興味深いのは、この男は「無口な激し易い憂うつな気質の青年で、ゲョエテは此男には我慢出来ず、殆ど交渉がなかった」⁴⁰⁾ ことである。或いは逆に木村謹治氏も言っている、「イエルーザレムは寧ろ多少の反感を以てゲ-テを見ていたとも想像される」⁴¹⁾ と。このことはヴェルターが作品において、愉快的仲間との交わりの中で憂うつそうに不機嫌にしている青年を激しく非難していることから首肯される。

しかし「彼の死によってイエルーザレムは恐らくヴェツラーの交友中何人よりも彼に近い存在となった。ゲ-テは彼の死を聞いた時の印象を記述して、『友の妻に対する不幸なる愛着によって惹き起こされたイエルーザレムの死は、予を夢から撼り醒ました』旨を書いている。」⁴²⁾ 又、当時のゲ-テのうけたショックをゲ-テは次のようにケストナーに報告している、「不幸なイエルーザレム！ その知らせは私を驚かせたし、予期しないものであった。快い愛の贈り物にそえてこのような知らせを受けるとは恐しいことだ……気の毒な青年！ 私が散歩から戻って、戸外の月の光の中で彼に出会った時、彼は恋していると私は言ったものだ。私がそのことで微笑んだことをロッテは今も覚えていると思う。確かに、孤独が彼の心を掘りくずしたのだ。数年来私は彼を知っているが、殆ど彼と口をきいたことがなかった。私が旅立つ時、私は彼から一冊の本を持ってきたのだが、生ある限り、私はそれを持っていて、彼をしのぶよすがとしたい」⁴³⁾ と。

「自己感情の強い、非常に激し易い」⁴⁴⁾ という点ではゲ-テに通じるところがあるが、ゲ-テの性格に反するとも思われる「控え目で、憂うつな、悲観的な性質」⁴⁵⁾ をもつイエルーザレムがこのようにしてモデルとしてとり入れられることで、ヴェルターは「ただゲョエテ自身よりは少々感じ易く少々軟く、且つ比較しえないほど弱い人間になっている。」⁴⁶⁾ 友と交わることを好まず、自尊心の強さ故の傷つき易さ、内向的な性格、悲観的な性分、そういったものはイエルーザレムのものであり、この性格がイエルーザレムの自殺の一つの大きな動因となっている。

「鋭い理知の批評力と憂うつ症的性格とは、ゲ-テに見られるよりも一層外界に対して非妥協的たらしめた。彼はゲ-テの属していた Rittersafel に属していたが、余り乗気になって一緒に興ずることもなく、多く孤独に傾いていた。こうした性格の人にはよくあるように、自意識が極めて敏感で、同時に他人に対しては皮肉な批評を浴せて快とする風があった。それだけ自身の侮辱は病的に彼の心を傷つけた事も考えられる。」⁴⁷⁾ 他人に対する皮肉な姿勢、その深癖さ故に、他人からはうとましがられ、それが余計に他人からの侮辱をうける機会を招くことになったと思われる。それが『ヴェルター』においては、伯爵家での不快な貴族のパーティーの場として描かれる。地位が低いにも拘らず、伯爵に懇意であるということで伯爵家をたずね、そのまま招待されてもいないパーティーに居残っていて、同席の人の反感をかい、それに気づかなかったヴェルターは、伯爵から退席を願い出られ、それがこれみよがしに口さがない人々の話題にのぼり、或いは又、この席に出ていた日頃親しくしているB嬢からは彼と交際していることで伯母にこっぴどく叱られたということを知られる。これを契機として、ロッテからも遠去かり内向的になりがちだったヴェルターはま

すまず世間から遠去かり、憤懣やるかたない思いをつのらせるようになる。このいわゆる「傷つけられた名誉心 (gekränkter Ehrgeiz)」がヴェルターの世間へ背を向け、自殺の思いへとかりたてられる一つの大きな決定的とも思われるきっかけとなっている。

しかしこの自殺の動機づけには賛否両論に分かれるところがある。もっともはっきりと不満をもちた人には『ヴェルター』を七回も反読し、エジプト遠征の際にも携えていったというかのナポレオンがいる。ナポレオンはこの小説を徹頭徹尾恋愛小説として一貫させるべきであるとし、ヴェルターの自殺の動機を不幸な恋愛に帰するべきであるとした。

そもそもゲテ自身のヴェツラーでのロッセとの恋愛体験は『ヴェルテル』にあっては殆ど第一部を以て了っている。⁴⁶⁾ それは一つの田園詩、牧歌として完了してしまっている。そもそもブランデスの言うように「併し激しい情熱が月並みの田園詩に終るならば、詩的興趣を殺ぐであろうから、ゲョエテは悲劇的結末を必要とした」⁴⁹⁾ のであろうか、或いはまたそれが為に、傷つけられた名誉心といったモチーフを必要としたのであろうか。その点に関連してグンドルフは次のように言っている、「ヴェルターの なかに不幸な恋人の悲劇のみを求めるならば、傷つけられた名誉心がモチーフとして挿入されていることは、効果を弱めるものであると非難されるであろう。…この非難はまさに、ここでは一つの事件の叙述が、不幸な恋愛は多感な若い男にあってはいかに発展するかという閉ざされた主題^{テーマ}の取扱いが、問題であるとする誤解から来ているのである。そう見れば、ヴェルターの地位や役所の不愉快等の道具立は、全部不必要であり、蛇足であった」⁵⁰⁾ ことになると。木村謹治氏は次のように言っている、「此の『単純、自然の道を以てしては生み出し得べくも思われぬ或る種の効果を生み出すために』用いた Kunstgriff がイエルーザレムの gekränkter Ehrgeiz のモチーフである。否厳密に言えば、ゲテが『容易に見出され得ない』と言っている Kunstgriff は、ヴェルテルの全人格の崩壊——失恋もその重要な要素である——を招来すべき有力な動機を意味する。この動機はナポレオンの言葉では gekränkter Ehrgeiz に相当するものであるが、ゲテにあっては、それよりも尚一層根本的な問題である。即ち gekränkte Menschenwürde である。誤れる社会階級の克服し難い不義に対する憤激、それはやがて社会生存の圏内から自己を除籍する結果になるものである。単純なる失恋動機にこうした社会対個人の問題から生ずる葛藤を加える事は、主人公を一元的な単純性格から救って、全人的、多元的苦悩の性能を具えた天才者たらしめるものであり、従ってそのもたらす効果に於て前者の場合とは霄壤の差がある」⁵¹⁾ と。木村謹治氏によれば、ヴェルターの自殺のモチーフを恋愛に一元化することなく、このイエルーザレムの屈辱事件を挿入することによって、ヴェルターの根本的な衝動、自由への止み難い衝動、制約されぬものへの意志、と共に、その多面的なる衝動、「階級観念、俗物道徳、主教的偏狭性等に対する突撃的天才主義」⁵²⁾ がより明瞭になったとする。しかしツィンマーマン (Rolf Christian Zimmermann) は言っている、いずれにせよ「ゲテはいかなる外的な事情にもヴェルターの悲劇的な結末に責任をもたせようとは考えてはいない。ヴェルター自身の中にわざわいの原因がある (Keine äußeren Umstände will Goethe für das tragische Ende Werthers verantwortlich gemacht wissen. In Werther selbst liegt der Grund des Übels.)」⁵³⁾ と。ヴェルタ

一自身の言葉によれば、「真実私は思う、私にのみ一切の罪があると。いや、罪だろうか。私の中に一切の悲惨の根源 (die Quelle alles Elendes) がかくされているというだけで十分ではないか。かつて私の中に一切の至福の根源 (die Quelle aller Seligkeiten) があったように」⁵⁴⁾ と。

『ヴェルター』を一つの田園詩、牧歌にとどまらしめないために必要としたのはイエルーザレムの厭世、失意といったモチーフであった。『ヴェルター』制作の過程についてゲーテは言っている、「それ(小説『ヴェルター』)はまだその形をとるにはいたらなかった。そこには事件 (eine Begebenheit) が、それが体裁をとるための決定的な一つのプロット (eine Fabel) が欠けていた」⁵⁵⁾ と。しかしイエルーザレムの自殺の報告をうけることによって「この瞬間に、ヴェルターの草案が見出された。全体があらゆる方面から集って結晶するにいたった。すでに氷点に達していた容器の中の水がほんのわずか揺すられることで堅い氷に変化するように凝固せる塊りとなった。」⁵⁶⁾ イエルーザレムの体験を挿入することで、ヴェルターはその自殺の心理学的な動機づけを得ることとなった。ハンス・ライス (Hans Reiss) は言っている、「彼(ゲーテ)はそれ(小説『ヴェルター』)を今日でも現代の心理学の視点からみて妥当するものとみられうるように十分に説得力のある首尾一貫したものに仕上げようとした」⁵⁷⁾ と。ハンス・ライスは、その心理学的動機づけの巧みさ故に、この小説に現代的意義があるとみなしている程である⁵⁸⁾。しかしそういう自殺への動機づけの挿入という作為故に、ゲーテ以外にイエルーザレムというモデルが加わることで、ヴェルターという人物像にやや統一を欠くことになったきらいがある。それと共に自殺の動機が具体的な動機に限定してみられがちであるというマイナス面をもったのではなからうか。ヴェルターのモデルであるゲーテとイエルーザレムは同じヴェツラーでの円卓仲間でありながら、殆どその交渉がなかったことから、その性格の対象的なことは明らかである。ブランデスも言っている、「ゲョエテのみがモデルになっている第一巻に於ては、ヴェルテルの姿は、自殺者として考えられるには、余りにも健康で強壯であることは、既に我々の指摘した所である」⁵⁹⁾ と。それに対してイエルーザレムがモデルとなっている「第二部は第一部とは根本的に異った性質をもっている。第一部は彫塑的で生き生きしているが、第二部は精神病的である。其処には始めの方の可成りの間は、ロッセのことが少しも語られていない。ゲョエテはここではもう自分自身をモデルにしてはいない。他の人に擦り替えられている。」⁶⁰⁾

もっとも、『ヴェルター』制作の当時のゲーテの心境がその性向の相違にも拘らず、極めてイエルーザレムに近かったことは、後にゲーテ自身も言っているところである。それ故にゲーテも又、イエルーザレムの自殺に対してはただならぬ衝撃をうけたのであり、それが『ヴェルター』完成の大きな原動力ともなったのである。しかし両者の性格が極めて類似するところが少ない事は事実であり、それにも拘らず、ゲーテがイエルーザレムという人物像を挿入してまで、何故ヴェルターをして自殺せしめたのであろうか。単にブランデス等の人が言うように、『ヴェルター』を一つの田園詩にとどめるならば、詩的興趣を殺ぐであらうが故に、悲劇的結末を必要としたのであろうか。それは単に効果の問題にすぎないのであろうか。

このヴェルターの自殺については、単純にそれを必然とみる多くの評価とは別に、その必然性を

単純に首肯しきれないとする意見もしばしばみられる。小栗浩氏はその自殺の意味について次のように語っている、『まるでゲーテは、『ヴェルテル』の制作によって自分の生命の危機をのりこえることができたかのような口ぶりである。芸術的創造が作者のある段階での生の確認であることは確かであり、作中人物の死によって作者が生きのびえたということもよくいわれるが、それはやはり比喩であり誇張であろう。少くともゲーテの場合、ロッテへの愛情がいられなければ死なずにはいられぬほどの切羽つまった状況にはなかった。恋すれば死ぬという形はあくまでも小説のひとつの趣向であって、ゲーテがこの形に託したものは、あふれ出る感情を無際限な沸騰にまかせたらどうなるかという、いわば一つの実験的な試みであった。だから、主人公の失恋による自殺は粹組にすぎず、そもそもこの小説の眼目は恋そのものにあるのではない。⁶¹⁾ (筆者傍点) 小栗氏は「ひとつの趣向」「一つの実験的な試み」として自殺の意味を解釈しておられるが、果たしてゲーテはかように第三者的な冷静な視点からヴェルターの自殺を描いたのであろうか。そこにはゲーテがヴェルターをして自殺せしめずにはおこななかったような内的衝迫・衝動・必然性のようなものはなかったであろうか。

ここで我々はやはりゲーテが自ら告白するように、ロッテ体験以後のフランクフルト時代のゲーテが極めてイェルーザレムの心境に近かったことを無視してはなるまい。しかしこの点に関しても疑義ありとする意見が高名なゲーテ学者からもみられる⁶²⁾。しかしここで我々が見のがしてはならないのは、ツィンマーマンも言うように、その第一部におけるヴェルターの横溢する健康にも拘らず、小説の初めから「ヴェルターがいかに死に親しんでいるか (wie Werther mit dem Tod vertraut ist)」⁶³⁾ ということである。このことを我々は無視してはなるまい。

三 情熱の運命

『ヴェルター』の小説に一貫して流れるテーマは「生 (Leben)」と「死 (Tod)」である。それも情熱 (Leidenschaft) の、感情 (Gefühl) の、心 (Herz) の、生と死である。第一部は生が描かれ、第二部は死が描かれる。ヴェルターの心が死ぬ時、ヴェルターは又命を絶つのである。

第一部の魅力は何といっても生の高揚であり、情熱の沸騰である。開かれた官能、みずみずしい感性の喜び、その讃歌である。ヴェルターは原初的に自然に沈潜する能力をもち、彼は人類の祖「アダムのように」⁶⁴⁾ 感じ、又、「神の如く、超人の如く、感ずることを欲する。」⁶⁵⁾ 「全一的生命を把持する敏感性」⁶⁶⁾ 「神に属するともいうべき高い程度の共感性」⁶⁷⁾ 「全一的直観」⁶⁸⁾ こそは彼の特徴であり、それがヴェルターをして「ぼくの唯一の誇り」⁶⁹⁾ と呼ばしめるところのものである。彼の認識は愛による認識であり、「その認識が客観的価値を要求しうるか否かは問題ではなかった。……わがうちに動いている此の愛心、この『聖に生かす力』即ち神に属する如き創造の力が心適くばかりに活動する事によって幸福感を体験しうるならば、それで満足である」⁷⁰⁾ という如き愛による認識である。ヴェルターは「生きるに値する認識の器官として、ただ一つ感情のみを認める。」⁷¹⁾ 彼の目指す芸術は自然の模倣であり、それも「所謂自然科学的な、実験的、写生的模倣で

はなくして、愛に充ちた模倣である。』⁷²⁾ 愛の充実の中であって、彼の認識能力はその最高の感性を帯びる。この愛による認識、これこそゲ-テがゼーゼンハイムでのフリーデリケ・ブリオン (Friederike Brion) との愛において覚醒、体験したものであり、

熱い血潮たぎらせて
私はきみを愛する。
新しい歌と
踊りにそえて、

私に青春と喜びと
勇気を与えてくれるきみ。
永遠に幸福であれ、
きみの私への愛とともに⁷³⁾。

とゲ-テを叫ばしめたものであった。このゼーゼンハイムでの開かれた官能の喜びは、このヴェルターにも、たとえゼーゼンハイムでの讃歌『五月の歌 (Mailed)』等ほどには手ばなしではないにしても、一抹のかげりはみせながらも、その余韻として色濃く漂っている。第一部において、ヴェツラーの近効のいたるところで、彼は息づく自然の中に陶然と身を浸す。

ところで、私はこちらに来て非常に元気だ。孤独はこの楽園のような土地で私の心には高価な香油のようだ。若々しいこの季節がこごえがちな私の心を精一杯にみなぎらせ、暖めてくれる⁷⁴⁾。

この地方には人をまどわす霊が漂よっているのか、それとも私のまわりのすべてを楽園につくりかえるような暖かな天のものなる空想力が私の心の中にあるのか⁷⁵⁾。

私は一人ぼっちだが、私のような心のためにつくられたようなこの土地で私の生活を楽しんでいる。……私のまわりの愛らしい谷がけぶり、光を通さない森の暗がりの上に太陽が高く休らい、ただわずかの光だけが奥深い聖なる場所にさしこんでくる——そんな時、私は流れ落ちる川のそばの丈高い草の中に横たわり、地面の高さから数えきれないいろいろな草々を観察し、草の茎の間の小さな世界のうごめきや、無数の眼にもつかない小さな虫やブヨの存在を私の心のすぐそばに感じる⁷⁶⁾。

そういう時、ヴェルターは「私達を自分の姿に似せて造り給うた全能の神の存在 (die Gegenwart des Allmächtigen), 私達を永遠の歓喜の中に漂わせて支えて下さる愛なる神の息吹き (das

Wehen des Alliebenden) を感じる。』⁷⁷⁾ (筆者傍点) 或いは自然が「大地の底で互いに作用し合い、互いを創造し、働きかけ合う」⁷⁸⁾ のを感じる。万物が一体となって働くのを見、それを統べているものの力を予感し、又それと自己との一体感を覚える。或る時には又、「無限なる者の泡立つ盃からあのあふれる生の歓喜を飲みほし、たとえ一瞬なりとも、私の胸の限られた力の中で、一切を自身においてそれ自身の中から生み出す存在の至福の一滴を (einen Tropfen der Seligkeit des Wesens [...], das alles in sich und durch sich hervorbringt) 味わいたい」⁷⁹⁾ と恋い焦がれる。「一切は情感に浸されている。彼は自然の中の生命が鼓動するのを感じ、その反響を彼自身の胸中に感じる。』⁸⁰⁾ 彼が求めるのは、感情の高揚の中で「愛をもって神に帰一融合する」⁸¹⁾ こと、——それはゲ-テが『ガニュメート (Ganymed)』の詩において求め、表現した感情の神化である。しかしそのような情熱の沸騰の中で、彼は感情の過剰の圧迫を感じ、苦痛すら覚える時がある。ヴェルターは友人ヴィルヘルムに言う、「君は僕に僕の本をいくらか送ろうというのかい？ 友よ、お願いだからそれはよしてくれないか！ 僕はもういろいろ指示してもらったり、元気づけてもらったり、たきつけてもらったりしたくはない。この心はこれで十分沸騰しているのだ。僕が必要としているのは子守歌だ。それも、そんなものはわがホーマーだけで十分だ。僕はどんなにしばしば苦勞して僕の沸騰する血潮をなだめすかし、寝かしつけることだろう。そもそもこんなにも変わり易く、うつろい易いものを君は僕の心以外には見たことがないよね」⁸²⁾ と。しかしこのような感情の沸騰は自然の中でだけでは、癒やされ、充たされることがない、それは自ずから具体的な対象、人間へと向わざるをえない。その湧き立つ情感にひたされたヴェルターの前に現われたのがロッテであった。ヴェルターは自らの情熱の対象を見出し、歓喜する。

しかしヴェルターの不幸はその情熱に際限がないことである。その対象が彼の情熱を満たしきるものでなくてはならない。彼が欲するのは絶対であって、相対ではない。この「ヴェルター的横溢」は「集注的」と「灼熱的」であるが故に、又「破壊的」なものである⁸³⁾。そこに又ヴェルターの愛の「巨人的 (titanisch)」であるといわれる所以がある。グンドルフ曰く、「プロメーテイスが創造の、ツェーザルが行為の、ファウストが努力の巨人であるように、ヴェルターは感情の巨人である (ヴェルターを巨人ということがいかに逆説的に聞こえようとも)」⁸⁴⁾ と。彼の愛はグンドルフも言うように、「宇宙的な愛」であって、神的なまでに高揚せずんば止まない愛である。そこに前田敬作氏はヴェルターの「愛のふかい宗教性」⁸⁵⁾ を見ておられる。或いは又、同氏はいみじくも言っている、「かれは愛を通じて神にいたろうとする。かれが愛のなかに求めるのは、ひとつの新しい宗教的な実存である」⁸⁶⁾ と。従ってグンドルフも言うように「ロッテやロッテに対する愛はこの宇宙愛の応用あるいはむしろ限定であるにすぎない。』⁸⁷⁾ しかしこの故にヴェルターは滅んでしまう。この世のどこにも限定を見出せないヴェルター的横溢にこそヴェルターの悲しみの因がある。真のヴェルターの悲しみ、それはロッテによって彼の愛が報いられないところにあるのではない。彼の情熱が絶対的であるが故にどこにも限定を見出しえない悲しみ——それをロッテによって報いられないという形で彼はぶちまけているという気さえする。

この際限のない情熱故に、彼は限定・制限の中で安んじて生きてゆける人をアイロニカルに見つ

めながら、それを羨しいとも思う、「子供のようにその日ぐらしに生きてゆける人は幸せだ。……自分のつまらない仕事に、或いは又自分の情熱に仰々しい名前をつけ、それを人類の歴史の安寧と福祉に資するために書かれたものと考える人は幸せだ。そんなことをしておられる人間は幸せだ。」⁸⁸⁾ 或いは又、ある農家の婦人について言う、「私の五官がもうどうにも耐えられなくなってくると、幸せに落ちついて自分の生活の狭い圏内でその日その日を精一杯生きて、木の葉の散るのを見ては、冬が来るといふことしか考えないような人を見ていると、何とか私の激情も収まってくる」⁸⁹⁾ と。それは彼が根本的に「無拘束、自由、天才的なもの、横溢するもの」⁹⁰⁾ につき動かされるからであり、それが彼をして「規則づくめなもの、制限あるもの、従って日常生活の仕事」⁹¹⁾ をいとわしいと感じさせる。

彼にとって「ノーマルな生活 (Normalleben)」⁹²⁾ とは「より高い要求の拘束 (eine Einschränkung höherer Bedürfnisse)」⁹³⁾ にすぎず、そこでいう拘束 (Einschränkung) とは「活動的な探求する人間の力が封じられている」⁹⁴⁾ ことに他ならない。巨人的、宇宙的ともいえる彼の情熱に比して、彼をとりまく世界は彼には単調 (einförmig)、かつ制限された (eingeschränkt) ものと映る⁹⁵⁾。そのことが彼をしばしば不愉快にさせ、時に傷つける。『ヴェルター』の初めところで、ヴェルターが「町そのものは不愉快だが、それにひきかえ、町のまわりには何とも口に出しては言い難い自然の美しさがある」⁹⁶⁾ と言っているのは、全体とのからみからみて象徴的である。当時、「ヴェツラーという土地は……典型的な俗物と盲目的階級意識に生きる貴族の巣であった。」⁹⁷⁾ 彼の豊かな感性・情熱故に、まわりの世界の人間の固陋さ、無果なる (unfruchtbar) ものとしての「生の感情を許さない社会の因襲や嘘やまやかしや虚栄心、心の怠惰 (die Konventionen der Gesellschaft, die nichts Unmittelbares duldet, die Lüge, die Heuchelei, die Eitelkeit, die Trägheit des Herzens)」⁹⁸⁾ 規則づくめを有難がる官僚人気質、暖かい心に水をさす分別くささ、そういったものが彼を傷つけ、憤激させ、彼とまわりの人との間に衝突をひきおこす。彼は言う、「みかけだけが立派で、光り輝いてみえる人達の惨めさ、隣り同士の人間をお互いに見比べあっている胸のむかつく人達の退屈さ、互いに一步でも先んじることに汲々として、位階を求める人達の根性、そのむきだしの最も惨めな、憐れむべき情熱。(das glänzende Elend, die Langeweile unter dem garstigen Volke, das sich hier neben einander sieht! die Rangsucht unter ihnen, wie sie nur wachen und aufpassen, einander ein Schrittmchen abzugewinnen; die elendesten, erbärmlichsten Leidenschaften, ganz ohne Röckchen.)」⁹⁹⁾ こういう世間の人間の狂態、それは根本的に暖かい豊かな心に根ざす情熱を欠いているからであり、それが伸張して止まぬ彼の心を制限する。「天才という川が氾濫することがかくもまれであるのは何故か。氾濫する洪水となつてあふれ出し、諸君の心が瞠目し、恐れおののくこと、かくもまれであるのは何故か? (warum der Strom des Genies so selten ausbricht, so selten in hohen Fluten hereinbraust und eure staunende Seele erschüttert?)」¹⁰⁰⁾ とヴェルターは問い、そして答える、「親愛なる友よ、その川の兩岸に冷静なる人が住んでいて、彼らは自分のあずま家やチューリップの花壇、野菜畑が壊滅に瀕するとしても、そのために時至ればダムを築いたり、将来おそってくるかも知れない危険をそ

らすことで、身を守るすべを知っている」¹⁰¹⁾ と。天才にみられるような情熱の奔流を制限するのは「世俗的なけちくささ (philiströse Kleinlichkeit)」¹⁰²⁾、「世俗の人の狭量なる心 (die Engherzigkeit der Philister)」¹⁰³⁾ であり、伯爵家での屈辱事件は、ヴェルター的な情熱の奔流とそれを疎外する社会・世間・俗物 (Philister) との不一致、軋轢の極端な象徴である。「ヴェルテルと貴族の自負僭望との衝突は、彼をつくった作者が、失われた美しさ、失われた神の如き子供らしさ、失われた真実を嘆く暗い悲愁の象徴的表現にほかならず、自然の息子であり愛人であり、ホームールの真実のあからさまなる人間存在の嗣子である彼を、全然疎遠な市民的環境へ無理矢理押しこめるところの仮装舞踏会に対する天才の回答である。」¹⁰⁴⁾ それはイェルーザレムにあってはいざ知らず、ゲ-テが自らのイデーを託すヴェルターにあっては、彼の自尊心を傷つけたというよりは、その社会的市民社会の狭隘さを彼の伸張する自我が絶望したというべきであろう。

しかし問題はそんなところにはない。それはやはり付随的なことだ。問題は、「ヴェルターが愛において彼が望む充実を見出せない ([...] Werther in der Liebe nicht die Erfüllung findet, die er sich wünscht)」¹⁰⁵⁾ というところにあり、「従って彼の愛は無果なるものであるにとどまり、それは生へと導くものではなく、死へと導くものである (So wird seine Liebe unfruchtbar, sie führt nicht ins Leben, sondern zum Tode.)」¹⁰⁶⁾ (筆者傍点) というところにある。彼の情熱が無果なるものであるが故に、彼は社会の無果なるものに反撻し、不毛なるものに対立し、絶望せざるをえないのだ。ここに本当の意味のヴェルターの絶望がある。ヴェルター自身、自らの情熱を「死に至る病い (die Krankheit zum Tode)」とみなしている。E. シュタイガーも言っている、「《あれかこれか (Entweder-Oder)》の言葉が出てくる7月26日付の手紙にはまた、キェルケゴール (Sören Kierkegaard) が彼の著作のタイトルとして選んだ《死に至る病い》の言葉もでてくる。これはヴェルターにとって十分に意義深い言葉である。……彼は断固として主張する、自殺はすべての《自然》死同様、病気の帰結として認められるべきであると。」¹⁰⁷⁾ キェルケゴールはその初期の主著の一つ『あれか・これか』の中で、人生の絶望は、美的生活 (= 享楽的生活) をとるか、倫理的生活をとるかの選択の決断がないところからくるものであると主張するが (後には更に宗教的生活も選択肢に加えられる)、ヴェルターもまた愛をとるか、分別をとるかの選択を拒否する (選択するということは又分別するということであり、それはすでに分別を選択していることになる。彼はその分別を拒否する)。「あれもこれも」分別をこえて一切を、絶対を希求する情熱に憑かれた人間の不幸をヴェルターは不幸な恋におちいった一人の少女のそれに例えている、「一人の気立てのよい若い娘が、家事の手伝いとか毎週のお決まりの仕事とかをしながら、狭い生活の圏内で成長し、楽しみといっても、日曜日ごとに、よせあつめの飾りに身をやつして、友達と一緒に町に出かけたり、にぎやかな祭りがあればダンスをすとか、よそでおこったけんか、かんばしくない噂話に何時間も隣近所の娘さんと夢中になってしゃべるとか、そういうこと以外に、何も知らないとする。しかしもちまえの性格の激しさ故に、彼女は一層切実な要求を体内に感じるようになる。男たちはちやほやし、そのことで内面の要求はいやまに激しくなってくる。もはや彼女の前からの楽しみは楽しみでなくなり、そんな時について一人の男性にめぐり会う。これ迄に覚えたこともない

ような感情が否応なく彼女をかりたて、ついに一切の希望を彼女は彼に賭けようと決意する。……すべての希望がかなうかのような約束がくり返され、加えて彼女の欲望をいやがうえにもかきたてる大胆な愛撫が彼女の心を完全に占領してしまう。意識はもうろうとし、歓びの予感につつまれて彼女は陶然とする。神経は張りつめ、ついに彼女は腕を伸ばし、彼女の望みの一切をひつつかもうとする。しかし恋人は彼女を捨てる。身は硬直し、呆然として彼女は深淵に立つ。彼女のまわりは暗闇と化し、見込みも慰めもなく、彼女は途方にくれる。……一人ぼっちであるかのような、すべての世界から見捨てられたかのような思いが彼女をおそう。……これが病気というものではないだろうか。混乱し、もつれあう力の迷路から抜け出す出口は自然には見つからない。そうになると、人は死ななければならない。(…), ist das nicht der Fall der Krankheit? Die Natur findet keinen Ausweg aus dem Labyrinth der verworrenen und widersprechenden Kräfte, und der Mensch muß sterben.)¹⁰⁸⁾」(筆者傍点)「自然が病いにおかされ、力がむしばまれ、それが働かなくなり、果ては再帰の見込もたなくなる。かくていかなる幸運によっても、日常生活の流れが元に復帰しえなくなる時、それをこそ、我々は死に至る病いと呼ぶ。」¹⁰⁹⁾ (筆者傍点) 無限の情熱にとりつかれた人間にも同じことがいえる。それは迷路から抜け出せず、元の健康状態にも回復することができない。それ迄関心をもちえた一切のものが生彩を失うにいたる。この情熱が高揚していた時は、「私の魂のただ一つの力でも使われずにいるということがあったであろうか?」¹¹⁰⁾ という程の充実を見せながら、それが涸渇する時、それは涸渇し、不毛の感に責めさいなまれる。「けだし、神性に向って拡大し行く感情、曙光に舞い上がりつつ宇宙と融合する感情の恍惚は……その活動領域が人間の狭い胸のみに局限されてある限り……避け難く拒否の瞬間を迎えねばならぬ。つまりは、恍惚と神化せられたる魂、歓声を挙げてみずからの神性を知覚せる魂、それは……肉体の制縛を脱し得たりと妄想したかかる歓呼の陶醉裡に……『人間の限界』を突破せりと信じた魂が、……いわば『深く深く滅びて行く』ところの瞬間が来るであろう。」¹¹¹⁾ この精神の振幅の大きさ、「ゆれ動く自己感情 (das schwankende Selbstgefühl)」¹¹²⁾ 「生の充実の欠乏と過剰 (Mangel und Zufluß an Lebensfülle)」¹¹³⁾ こそがヴェルターであり、その感情の横溢の瞬間には有果なるものに見えながら、涸渇の瞬間を迎える時、それはどこ迄もとめどなく無果なる気分の中に落ち込んでゆく。つまり心が死んだと絶叫せざるをえない瞬間がやってくる。涙さえもかわく。自分のうちにみなぎっていたものはどこに行ったのかと嘆かざるをえない。

生き生きとした自然に触れて私の心を充たした暖い感情は、大いなる歓喜の洪水で私をひたし、私をとり囲む世界を楽園をつくりかえたが、それが今や私には耐え難い拷問者となって、どこまでも私を追いたて苦しめる霊となった¹¹⁴⁾。

私の魂の前で一枚の幕がとりはられ、限らない命のあらわれが私の前で永遠に開かれた墓の深淵と化した¹¹⁵⁾。

ああ、この心の空白！ この私の胸に感じる恐しいまでの心の空白！¹¹⁶⁾

私は思う、私にのみ罪があることを——いや、罪ではない！ 私の中に一切の悲惨の源が隠されていることを。それだけで十分だ。かつてはすべての至福の源が私の中にあったというのに。この私は一体、感覚のみなきる充実の中に漂い、一步步むごとに楽園に足を踏み入れ、全世界を愛の限りに抱きしめたあの私なのだろうか。その心が今は死んでしまった。もはやいかなる感激もそこから流れ出ることがなく、私の眼は乾き、私の感覚は心なごませる涙にうるおうことなく、神経は不安げに私の額のところにしわをつくる。苦しい。けだし、私の生の唯一の歓喜であったもの、聖にして命を生み出す力であったもの、それが失われてしまった。どこかへ行ってしまったのだ！……ああ、このすばらしい自然が私の前で、ニスを塗られた絵のように生彩を失い、あらゆる歓喜がその至福の一しづくをも私の胸奥から脳へくみ出すことができなくなった。この男が今や神の前にひからびた泉、水の漏れた桶のようにつつたっている¹¹⁷⁾。

第一部の終わりから第二部にかけて、このような嘆きの声が大半をしめる。それは自ら神の寵児であると妄想していたものの没落の嘆きである。『ヴェルター』の終りに長々と続く『オシアン (Osian) の哀歌』は、ロッテに対する愛の晩歌であるより以上に、ヴェルター自身の心の晩歌ではなからうか。

私の枯れる時は近い。私の葉を吹き払う嵐は近い。明日、さすらい人が来る。私の美しかりし時を知る人が来て、荒野を見わたし私を探すことであろう。しかしもはや私はいない¹¹⁸⁾。

勿論、この小説の体裁は、横溢する情熱の沸騰がロッテによって報いられないためにヴェルターが倒れるようになっているが、第二部にうつってからは、ロッテのことは殆ど語られることがない。関心はもはやここにはない。あるのは情熱が死んだ、心が死んでしまったというヴェルターの嘆きである。この時期、ゲ-テは情熱の沸騰と同時に、この情熱の癒やし難さ、その途方もないどうしようもなさ、情熱の暴力と不毛、それを身にしみて味わった時期ではないだろうか。ロッテへの愛着の思いと平行しながら、他方で情熱の不毛感がつり、孤独になるにつれて、その感情はいや増しに増したのではなからうか。「自然のいたるところに隠されて、一切を侵蝕する力、それが私の心を掘りくずす。それが生み出すものは隣人をも自分自身をも破壊して止まない。そこで私はよるめて不安におびえる。天と地とそれの織りなす力が私のまわりを取り囲む。私が見るのは永遠に一切を飲み込み、反芻する怪物以外の何ものでもない。」¹¹⁹⁾ 彼の愛、情熱は生の充実へと導くかにもみえて、それは死へと導くものでしかない。有果なるものにみえて、どこまでいっても無果なるものでしかない。ここにヴェルターの絶望があったのであろう。ヴェルターは言っている、「我々はあこがれる。ああ、我々の存在の一切を捧げて、唯一の偉大な輝かしい感情の歓喜の一切でもって

満たされたいと。そしてああ、我々がそれを手に入れたとたん、かしこがことなる時、すべては旧態依然のままであり、我々は貧困と限界の中にとどまる。そして我々の魂は失われた歓喜を求めてあえぐのだ。』¹²⁰ 「人間とは？ 半神と讃えられた人間とは何か？ 無限なるものの充実の中で我を忘れようと憧れる時、まさにその時に、彼は鈍く冷たい意識に連れ戻されるのではないか？』¹²¹

それではこのように情熱が没落するのは何故であろうか。凋落が情熱の運命さだめとはいえ。グンドルフはそれをヴェルターの「不本意なる断念」によると言っている。「『ヴェルター』の特殊な主題は、感情の巨人の美しき瞬間に対する悲劇的な不本意な断念である」¹²² と。ヴェルターはロッテへの愛を自ら断念し、沸騰する情熱の出口 (Ausweg) が見出せないが故に滅ぶ。ゲ-テがイェルーザレム=ヴェルターに見たのは、この情熱の没落、心の死であった。情熱の没落、エロスの没落は、ゲ-テも又自らの内に見出したものであり、ゲ-テがイェルーザレムのうちに自らの運命として見たものであった。それがゲ-テをして、衝撃をうけ、ヴェルターの中に結晶化し、形象化せしめた所以のものであった。イェルーザレムのうちに、自らを絶対化し、没落してゆく情熱の、エロスの運命を見たのであった。しかもイェルーザレムと同じくするのは、その愛の断念であり、それ故の破滅の予感のようなものがゲ-テにもあったのではなからうか。しかしゲ-テにおいては、イェルーザレムのようにその愛が報いられないが故に、というような単純な思いからする断念ではなかった。そもそもロッテへの愛が入れられないという位のことで、ゲ-テの情熱は萎縮しはしない。ロッテへの愛を断念し、ヴェツラーを去り、新しい恋人マリシミリアーネを見出した時、「古い情熱がなお完全に消えやらぬ先に、私達の内なる新しい情熱が湧き上がろうとするのは、はなはだ快い感情である。』¹²³ とぬけぬけと言うゲ-テである。自分の情熱が受け入れられないという位で破滅するというようなゲ-テではない。ヴェルターにとってロッテへの愛の断念は自身一切の滅びを意味したが、ゲ-テにとっては、ロッテに対する愛の消滅は一つの情熱の滅びでしかない。むしろゲ-テが危惧したのはそんなことではない。「彼女は宇宙へと拡大し、また万象を己れのうちに充填する感情の無限性にとっては、港にすぎず、投錨地にすぎなかった。いわば単なる像にすぎなかった。それは愛に捉えられたる者に、しばらくのあいだ『無限なるもののすがた』を映すかに見えながら。』¹²⁴ 「こうした『至福なる憧憬』の求むる最後の目標は肉体的な占有ではない。かかる憧憬にとっては恋人は闕にすぎぬ、通路にすぎぬ。彼女はゲ-テの魂のなかの形而上的な一契機、愛をつくりなすエロスの本質にほかならぬ。なぜなら愛は個体の『死』、『人格』の死にほかならず、……エロスの満足裡に死ぬ『生けるもの』の『焼死』にほかならない」¹²⁵ とホーエンシュタインも言っている。

ゲ-テにとっては、情熱の滅び、エロスの凋落こそが問題であって、それをこそ彼は危惧するのだ。そもそも「加速度をもったゲ-テの愛は、愛の完全よりもその破綻へ急ぐべき、より多くの要素を持っていた。』¹²⁶ ゲ-テの情熱は自己を絶対化することによって、それは又滅びへの運命をも

っている。「彼女（シャルロッテ・ブック）がケストナーから離れなかったのは、その生まれつきの節操によるのか、それともまたこのような天分を持った青年を捉えようとするのは、結局地獄へ墮ちる所以であることを予感したためであったのか十分には解らない」¹²⁷⁾と茅野蕭々氏も言っているが、この地獄へ落ちる所以のもの、自己をも他をも破滅に引きずり込んで止まぬもの、それがゲ-テの愛であり、ヴェルターの愛の根底にひそむものである。この情熱の悲劇、エロスの悲劇をゲ-テはまたよく知る人であった。情熱は恍惚へ人を導くかみえて、情熱は地獄へと人を導くのだ。その一つの在り様が『ファウスト』にみられる「グレートヒェン（Gretchen）悲劇」であり、乙女グレートヒェンをしてファウストが罪を犯さしめ、破滅にひきずり込んだ当のものであった。この情熱の悲劇を知るが故に、ゲ-テは絶えず恋人からの遁走をくり返すのだ。それはゲ-テが絶えず愛に捉われると同時に、愛を断念したことを意味するのではあるまいか。『ヴェルター』はロッテへの愛が報いられぬが故に断念するという体裁をとっているが、その裏にはこのゲ-テ的な愛の断念がかくされているように思う。ここにヴェルターの悲しみの背後にかくされた真のゲ-テの嘆きがあるのではなからうか。そこに本来のゲ-テの不本意なる愛の断念の悲しみの響きがある。イェルーザレム的な愛の断念とゲ-テ的な愛の断念は根本的に違う。しかしヴェルターにあってはこの両者の断念が交錯している。そこにヴェルターの自殺の真のモチーフの見極め難さがあるのではあるまいか。しかし愛の断念、情熱の断念はゲ-テにとっては死を意味する。従ってヴェルターも又滅びざるをえない。ゲ-テが作品の中で創造した人物の一人「ヴィルヘルム・マイスターは（Wilhelm Meister）はよくこのことがわかっていた。彼はすべてのものに初めて意味を与える一つのものが欠けるなら、一切は無に等しい（[...] alles nichts ist, wenn ihm das Eine fehlt, das allem erst Sinn verleiht.）と言っている。そしてゲ-テ自身、最晩年においてなお、ウルリケ・フォン・レーヴェツォーとの別れの後に告白している、

私には万象が、私自身が失われたのだ。

と。万象と私自身は榮える時も滅びる時も、切りはなし難く、結びついている。私自身の本質は、私が愛し、愛されている限りにおいてのみ、存在しつづけるのだ」¹²⁸⁾（筆者傍点）とE. シュタイガーも言っている。ゲ-テは情熱というものの出口（Ausweg）のなさを知っていた。それがどこまでいっても無果（unfruchtbar）であるということ。そうとは知りつつ、ゲ-テは瞬間の情熱に身を焦がす。そのみが生きていることの証しなるが故に。それが失われることは、ゲ-テにとってもやはり、自身の死を意味するが故に。

ツィンマーマンは言う、「ヴェルターは拡張と熱狂の純粋な化身である（eine „reine“ Verkörperung von Expansion und Enthusiasmus）」¹²⁹⁾と。情熱を閉じこめる制限・拘束を越えて拡張せんとするところにヴェルターがある。そこにゲ-テが作品化せんとしたプロメトイス、マホメット、シーザーといった巨人達、努力の人として、絶えず自己を乗り越え、再生を試みんとするファウトと等しくするところの「感情の巨人」ヴェルターの本性がある。

しかしヴェルターは受動性 (Passivität)¹³⁰ の人である。自己を乗り込め、情熱の沸騰に身をまかせるには余りにも弱い。ヴェルターに欠けているのは、自己閉鎖の中から、思弁的空想の中から第一歩を踏み出す「行為する力 (Tatkraft)」¹³¹ である。元来、ヴェルターの愛は、感性豊かな人にはつねのこととして、この世的なるものに基盤を置く愛であって、それはゲ-テが絶えず永遠の女性を求めながらも「苦しみ、もだえ、喘ぎながらも、依然として、その生の日のある限り、此の地上の女性に愛着することをやめなかった」¹³² の軌を一にしていた筈である。「彼は大地に根ざす人間として瞬間の恵みを待望している。」¹³³ しかしヴェルターはこのゲ-テ的な性向を捨てて、イエルーザレム的な「内観的な傾向の人物」¹³⁴ に移し置かれることとなった。「イエルーザレムは著しく哲学的 思索的傾向の人物で、彼が選んだ世間人的職務には適しておらない」¹³⁵ 人物であった。元来、「彼は人間においても専ら把握しうるもの (das Faßbare) ではなく、ただ単により高き完全なものの反映を (den Abglanz höherer Vollkommenheiten) のみ愛する」¹³⁶ 性向の人であったが、今はいよいよその抽象的なものへの愛着を深め、「狂熱的な夢想にふけて思弁の谷間におちこみ」¹³⁷ 形なきもの、無制約なものへと彼の感情をひき上げる。かくて彼は無限に空虚な空間へと脱却をはかる。元来、死に親しむことの多いヴェルターは歓喜と苦悩の交錯の中にあって、出口のない無果なる情熱が吹き荒れ、それに責めさいなまれる時、死へと憧れることがあった。「すべて発達の旺盛なるものにあって、その生命力の横溢から来る圧力とでもいうべきものから、全くその反対の死を憧れるという如き傾向のあることは、寧ろ普通であると言ってよいであろう」¹³⁸ と茅野蕭々氏も言っておられる。R. フリーデンタールは言っている、「死への憧れ、死への愛着、ドイツ文学の宿命となった基本的なモチーフの一つ、それがこの作品にすでに響きはじめている」¹³⁹ と。要するに「ヴェルターはその初めから死に至る病いの萌芽を自らのうちにもっている。(Werther trägt von Anfang an den Samen einer Krankheit zum Tode in sich.)」¹⁴⁰ この情熱の圧力からくる死への憧れが、更には彼をとりまく世界と彼との不協和音がヴェルターをして、この地上的なものに基盤をおくゲ-テ的な性向を捨てさせ、自らの官能が「限定されたもの・肉体的なるものなかに呪縛されている」¹⁴¹ と感じるヴェルターは、「万有のなかに没入」¹⁴² せんことを欲する。それは彼岸への憧れであると共に、又自然への帰趨の憧れでもある。かくてヴェルターは叫ぶ、「自然よ！ 彼の息子、汝の友、汝の愛人は終末に近づく」¹⁴³ と。「ヴェルテルはみずからを殺す——、換言して、彼は宇宙へと解けてこむのだ。エロスが人間を破砕しつつ、みずからの本質に燃え移るのだ。存在者ヴェルテルが、みずからの存在を消滅しつつ、彼の母の肉体に帰り行くのである。」¹⁴⁴ ヴェルターの死、それは「己れを閉じこめている人間の胸から、力強く伸張して強引に爆発し、かかる人間の胸を粉碎しながら自己の本源の無限へ還流せんとするエロス」¹⁴⁵ の充足でもある。ホーエンシュタインは言う、「感情こそ一切なのだ。彼が愛しつつ彼の『生を感じる』ことを許されているということはまさに幸福にほかならぬ。彼が彼の力の許す限り、感じつつみずからを拡大し伸張し、『人間の限界』を、換言すれば彼を狭く閉じこめている肉体の限界を破砕し追い散らしつつ自由を求めるといふこと、これがエロスの活動の目標であり、これこそエロスの占有獲得であり、充足実現である。」¹⁴⁶ と。フェウストは、胸にみなぎる永遠なる感情、

「それを幸福、心情、愛、神と名づけようか、俺はそれに名づくべき名を知らぬ。感情こそ一切だ。名前はひびき、霞、天の自熱をくもらすものにすぎぬ」¹⁴⁷⁾ と言っているが、このような無限感情をヴェルターは死をもって完うせんとする。「死こそ有限より無限にいたるヴェルテルに残された唯一の最後の道なのである。」¹⁴⁸⁾ 「ヴェルテルの死は火山の爆発であり、エロスの破獄である。」¹⁴⁹⁾ しかし又一方で「ヴェルテルに、不真実なるこの世の滞留を不能ならしむるものは悲愁である」¹⁵⁰⁾ とホーエンシュタインは言う。

四 悲劇のモチーフとしての「不幸なる情熱」

しかし、それにしても何故ヴェルターは死を選ばざるをえなかったのか。既に述べたように、そこにゲートもいろいろと動機づけに苦慮しているわけであるが、その動機づけを「ナポレオンは此の小説に於て gekränkter Ehrgeiz と leidenschaftliche Liebe との Motive の混合に見出しており、それを非難して、『それは自然的ではない。そして恋愛がヴェルテルに対して持つ圧倒的な影響の観念を読者に於て弱める。何故に卿はそれをなされたのですか』といかにもナポレオンらしく単刀直入に質問している。ゲートはこの非難を richtig und scharfsinnig であるとして、例えば縫目が見えないように巧みに仕上げた袖を見て即座にその縫目を探し当てる達者な裁縫師の様であるとミュラー宰相に向かって物語った」¹⁵¹⁾ といわれる。「二つのモチーフの問題は二様の材料の問題である。即ちゲートの体験とイェルーザレムの事件とである。この二様の材料が有機的統一に融合され得るならば、二つのモチーフの問題も亦自ら解決せられる。本来ゲートのヴェツラーに於ける体験は、『ヴェルテル』にあっては殆ど第一部を以て了っている。」¹⁵²⁾

それでは何故にイェルーザレムの事件をモチーフの一つとして挿入せざるをえなかったのか。単にヴェルターの人物像に多面性をもたせ、広がりをもたせるためにすぎなかったのか、それとも心理学的にみて説得力をもたせるためであったのか。我々はあらためてもう一度問おう、それはただ単に効果の問題にすぎなかったのか。死というのは軽くないテーマであるし、又ゲート自身好まなかったテーマである。それにも拘らず、何故にゲートはあえてヴェルターをして死を選ばしめなければならなかったのか、その必然性はどこにあったのか¹⁵³⁾。そしてこれこそが本論文の主要なテーマである。

勿論、ゲートは当初、『ヴェルター』にこういう結末を与えることを考えていなかったであろうが、何故にイェルーザレムの報を聞いて、この小説は「氷点に達していた容器の中の水が、ほんのわずかにゆすぶられることで一挙に凝固せる氷に変する」¹⁵⁴⁾ ように、その形をなすに至ったのであろうか。そのモチーフのヒントがこれによって与えられたというにすぎないのであろうか。イェルーザレムの事件を知らない以前のゲートは、『ヴェルター』の草稿をすすめながら未だ十分に当時の彼の心境の体験を描ききっているという充足感もちえなかった。当時の彼の心境、体験は一つの牧歌・田園詩に尽きるものではなかった。もっと違った内容を盛り込む必要、衝動を感じていたのであろう。おそらくイェルーザレムの自殺の報に接した時、彼は今まさに我が意を得たり、

の感をもったことであろう。問題は、すでに第一部のヴェルターが死への方向性をもっていたことである。茅野蕭々氏も言っている、「彼が若し恋愛に於て欲するものを得たとしても彼の如き性情を以てしては、結局この世に於て幸福にはなり得なかつたであろう」¹⁵⁵⁾と。或いは又、ピールシヨウスキーも言っている、「いずれにせよ彼は世間の荒波をうけて暗礁に乗り上げざるをえなかつたのだ。彼の名誉心が傷つき、彼が彼の上役につまらぬことで悩まされようと、或いは彼が終りのない、みのりのない愛に苦しむことがあろうと、いずれにせよ、彼の運命はすでに決まっていたのである。」¹⁵⁶⁾従って自殺の大きなモチーフとされる「失われた恋」も「傷つけられた名誉心」も他の諸々の不快事もすべて直接の彼の自殺のモチーフではない。むしろナポレオンが非難した恋愛以外のモチーフを導入したことは、失恋すらも自殺の直接の原因ではないことを示すものとして、木村謹治氏はその妥当性を認めている¹⁵⁷⁾。しかし他の諸々のモチーフもなおヴェルターの直接の自殺の要因ではない。「とにかくヴェルターの悲劇がその境遇から来ていないで、その性格から来ていることは、この作に於て最も注意に値する所である。」¹⁵⁸⁾

ゲ-テとイエルーザレムはその性向において極めて相反するものがあつたとはいえ、彼がイエルーザレムの自殺の報に接して、衝撃をうけたのは「自らの運命となりえたもの」をまのあたりにしたからであつた。かといつてイエルーザレムが失恋をしていたということ、屈辱事件を体験したということが問題ではない。彼が彼をとりまく世界に相反するものを自らの内に感じ、その充足が見い出されないが故に、彼が絶望し、自殺したということが問題であつた。そこに自らの運命となりえたものを彼は見出したのだ。グンドルフ曰く「彼の感情や体験がそのなかに客観化されねばならなかつた行動の担い手の適当なる象徴として、今や、彼自身のうちのすべてが成熟する果実として彼からまさに離れ落ちようとしていた危機的な刹那に、彼に立ち現われたのは、自殺をした若きイエルーザレムである。もちろん、内的体験の担い手のためには、ゲ-テは最初から象徴を必要としなかつたであろう。そのためには彼は彼の自我を持っていた。彼はそれに名を与えればよかつたのである。そして彼が自我を彼自身の自我として、同時に他人の自我として作用せしめることのできた好都合な形式は、外部からの衝撃を必要としなかつたであろう。けれども筋を完結せしめ、内的可能性を明確な現実に凝縮するためには、彼の自我だけでは足らなかつたであろう」¹⁵⁹⁾（筆者傍点）自殺したイエルーザレムはまさにゲ-テの「内的可能性」の「象徴 (Symbol)」、 「凝縮」であつた。このイエルーザレムの自殺、つまりはヴェルターの自殺をゲ-テ自身の内的体験の象徴と見るところにグンドルフのすぐれたヴェルターに関する解釈がある。グンドルフは更に言う、「若きイエルーザレムの行為は同時代的可能性の拡大、環境の、風俗の、視界の拡大、なかんづくゲ-テが頼らねばならなかつた象徴領域の拡大であつた……市民的な温順なる理性が、この事件によって爆破されないまでも、非合理的なるもの、情熱的なるものなかへ拡大されたという漠然たる感情であつた。」¹⁶⁰⁾（筆者傍点）或いは又「ゲ-テにとって自殺全体は彼自身の情熱的な苦悩の歴史をまとめ上げ、完結せしむるための象徴的・象徴創造的機縁に過ぎなかつた」¹⁶¹⁾（筆者傍点）と。

ゲ-テ自身当初『ヴェルター』を脱稿した時は、ヴェルターを絶対的に肯定して描き切つたといふわけでもなかるう。むしろヴェルターというその存在と没落を、ある種の内的衝動、内的必然性

をもって描き切ったというべきであろう。没落せざるをえない、破滅せざるをえない必然性を彼は自身のうち感じざるをえなかったのではないか。そこにゲテ自身永くヴェルターを自らの評価の将外に置かざるをえなかった原因があったのではなからうか。それをどう評価すべきかは、晩年を迎える迄のゲテには出来なかった。

ヴェルターの魂の双生児というべきファウストにも又、出口のない無果なる行為としての思弁に疲れ果て、毒杯をおおごとと決意する瞬間があることを我々は忘れてはなるまい。時には暖かく、時には皮肉にゲテを見つめる R. フリーデンタールは「ゲテが老年になって、この時期の彼自身の死についての考えを述べているくぐりは、我々には本当とは信じ難い。彼の語るところによれば、彼は叱首をもて遊び、それを素肌にあてがい、それから脇に置いたというのであるが」⁶²⁾ と言っている。確かにこのエピソードを記述する『詩と真実 (Dichtung und Wahrheit)』には、この表題が示すとおり、詩(虚構)と真実が交錯しているわけであるから、それを文字通りの真実と受け取る必要はない。勿論真実と受け取ってもよからうが、その詩を通して告げられた新たな真実にこそ意味がある。少くともそれがたとえ詩(虚構)であるにしても、それを通して告知された意味、真実にはやはり我々は注目しなければならない。その感情の爆発は絶えずということではなく、たとえ間歇的にはあるにしても、若いゲテが死への衝動を全く感じなかったとは考えられない。ファウストの自殺へとかりたてられる衝動の必然性に誰れが疑いをさしはさむものがある。彼はそれを描かざるをえなかったのだ。あの外面的には全く自殺の必然性、モチーフに欠けているあのファウストがである。街を歩けば、市井の人が讃嘆を措きまぬ英知の誉れ高きあのファウストがである。ところがヴェルターには諸々の自殺のモチーフとも見える出来事が挿入されているが、それがかえて逆に個々のモチーフとも見える事柄に眼を奪われ、ヴェルターの自殺の必然性、その真のモチーフに疑義をもたしめる原因があるのかも知れない。要するに、当時ゲテの中に死への憧れ、死への欲求があったことは R. フリーデンタールも認めることである。R. フリーデンタールは言う、「彼の死への憧れは、彼がこの世での生を完うするまで、絶えず再生(Wiedergeburt)への思いに移行して行く」⁶³⁾ と。

当時の彼の周辺が極めて荒涼として寂寥にみちたものであったことも事実である。ゲテの周辺にいた人、彼をよく理解してくれる人が次から次、彼の周辺から去り、又「彼を包むフランクフルトの社交界は、舞踏、^{ピクニツク}散策、観劇などによって一時の官能的昂奮は提供するにしても、内面的欠如に対する何ものをも提示し得なかったのである」⁶⁴⁾ 「彼に拍手した大衆とは何であったのか? 疾風怒濤の時期の天才らしい言葉で、『豚の群』と彼はそれを表現した。彼が示した最もよきもののほんのわずかの概念をも大衆は理解しなかった。彼の周辺の最も有為な人も今は彼から遠く去り、彼は機会あるごとにぞっとするほどの孤独を感じた。最も偉大な精神というものは、時おり、あるいは場合によってはつねにそれを感じざるをえないものだが。1773年、この孤独はいや増しにつり、彼の鋭い苦痛の叫びがこの苦悶を物語る、『私は水なき荒野をさまよう。わが髪の毛こそ唯一つの日影、わが血こそ唯一つの泉。』そして絶望が時おり彼をとらえたことは考えられないだろうか。思いはばかることなく、罪をつくることなく、彼は愛する人を所有することも、楽しむことも

できなかった。彼が存在するだけで不幸をもたらし、自分で知らないうちに優しい人の心を萎えさせてしまう。」¹⁶⁵⁾

天才を謳歌した時代はすでに過ぎ去りつつあった。確かに、「天才の力に対する信頼が (der Glaube an die Macht des Genies) この小説には見られる。従って、この小説の主人公は当時の読者には感情の先駆者として (als der Protagonist des Gefühls) 登場することができた。」¹⁶⁶⁾「後にゲ-テは当時の彼の状態を不合理として (als absurd) 記述したが、しかしすでにこの作品において、人はヴェルターの自らの苦悩のとらえ方に批判的な姿勢を感じとる。しかし初めは背景においてのみではあるが。前景においてはヴェルターの願いと痛みが圧倒的な共感をもって描かれている。」¹⁶⁷⁾ ヴェツラー時代にもすでに「ゲ-テ自身はなお『感情が総べてである』シュトゥルム・ウント・ドゥラングの雰囲気の中にありつつも、心の中の或るものは既に安静な活動を翹望していたのであろう」¹⁶⁸⁾ と茅野蕭々氏も言っているほどである。『ヴェルター』執筆の当時は、情熱の歓喜よりもむしろその苦悩がより強く彼を圧迫していた筈である。若いゲ-テが好んで奇矯な行為に出ることが多かったのもデスペレートな迄に、彼の出口のない情熱が彼の内奥を荒れ狂ったことによるのであろう。この情熱の出口のなさをヴェルターはこう表現している、「余りに追いたてられ、駆りたてられると、呼吸の苦しきの余り、本能から血管をかみ切ろうとする血統のよい馬の話聞いたことがある。そういうことが私にもしばしばある。私もまた永遠の自由を欲し、血管をかみ切りたいと思うことがあるのだ」¹⁶⁹⁾ と。この当時の彼には沸騰する情熱と共に、それに形を与えてやれない、出口を与えてやれないという不能感からくる焦燥のようなものがあることも無視できない。外に出口を求めて見い出せない情熱は彼の内奥にあって荒れ狂い、彼は雷雨の中を山野を歩き回り、或いは自らの血管を食い破ろうとするのだ。

時々、悲しみが限度を越し、ロッセが私の胸のつかえが晴れるように思い切り泣かしてくれればいいのだが、それを許してくれない時、私は出てゆかなければならない。それから私は原野をあちこちさまよう。険しい山をよじ登り、人の通れないような森の道をわけいることも、籐で傷つき、茨で体を切り裂くことも私には喜びだ。それで私はいくらか気分がよくなる。いくらかだが……。そして疲れ果て、のどが渇き、道端に寝ころび、真夜中に中天の満月を仰ぎ、孤独な森の中で、弓なりになった木の枝にのぼり、傷ついた足を少しばかり休める。それから疲れをさそう静寂の中で、うす暗がりの光を浴びて、うとうととまどろみに落ち込んでゆく時……。おお、ヴィルヘルムよ、孤独な庵の住まい、獣の毛の衣、茨の帯こそが私の慰めであって、私の魂はそれを恋い焦がれ求めるのだ¹⁷⁰⁾

と、ヴェルター＝ゲ-テは叫ぶ。

ビールショウスキーも、「それ故、ゲ-テが、ヴェルターを破滅へ導いた不都合な動機は、それ自身、全くの付随的な苦しみであって、それ以前にすでにヴェルターは空想的な夢と思弁によって掘りくずされていたと言っているのは正当である」¹⁷¹⁾ と言っているように、付随的な苦しみによ

って決定的に死へと導かれる以前に、すでにヴェルターの心は掘りかえされていたのだ。ヴェルターは情熱にとりつかれている。それはただ単に一つの恋の情熱に尽きるものではない。それはどこ迄いっても不毛な嵐、出口を求めて荒れ狂い、無果なるものとして終らざるをえない青春の嵐なのだ。この不幸なる情熱との格闘の物語、それが『ヴェルター』であるということが出来ないであろうか。そういう意味においてヴェルターは、若きゲ-テの最も忠実な形象化、象徴であったということができる。晩年ヴェルターに宛てた手紙にも「生の嫌悪 (taedium vitae) が人をおそう時、その人は同情されこそすれ、非難されるべきではない。この奇妙にして不自然な、それと同時に自然な病気のあらゆる徴候 (alle Symptome dieser wunderlichen, so natürlichen als unnatürlichen Krankheit) がかって私の内奥をも荒れ狂ったことはヴェルターが何人にも疑わしめないであろう。当時、死の波を乗り切るのに、どれ程の決意と努力を要したかは私のよく知るところである。それは後年の多くの難破において自分を救い、難儀しつつ立ち直ったのと全く同様である」¹⁷²⁾ (筆者傍点) とゲ-テは言っている。

五 結 び

しかしヴェルターは死に、ゲ-テは生きのびて、83才の天寿を完うする。殉情 (Treuherzigkeit) の人、ヴェルターは自ら死ぬ運命^{さだめ}の人であった。「ゲ-テ自身は漸く作中から脱出して、作の主人公は、時代の精神に動かされつつ、その病幣にたおれる人間となったのである。作中の主人公を殺すことを好まなかったグョエテが、この自殺を取てさせたことは、彼が時代からの超脱を語るものとも言われよう。」¹⁷³⁾ それではゲ-テはどのようにしてこの危機を克服しえたのであろうか。

ここに、当時のゲ-テのエピソードを、重複することもあるが、いくつか列挙してみよう。

ヴェツラー時代、ロッテへの情熱が高じて、制御がつかなくなった頃、ゲ-テはロッテから接吻を奪う。ロッテは正直にそのことをケストナーに話す。そのことで気分を害したケストナーはロッテにゲ-テの熱を冷ますように忠告する。ケストナーの日記には更に続けて次のように書かれている、「14日の晩、ゲ-テは散歩から戻ってきて、庭先きにやってきた。彼は冷淡な応待をうけ、まもなく立ち去った。15日の晩、10時頃、彼はやってきて、私達がドアの前に坐っているのを見た。彼のもってきた花は冷淡に放り置かれていた。彼はそれを知って、それを投げ捨てた。そしてたどえでいろいろ話をした。私はゲ-テと夜、12時頃、散歩に出かけて、奇妙な話を交した。彼は不機嫌で、いろいろ空想にふけていた。しかし、我々は月の光を浴び、壁にもたれて、ついには笑った」¹⁷⁴⁾ (筆者傍点) と。

或いは又、『詩と真実』において、当時、幾度か自殺への思いにとらわれながら、或る時、「しかしこのことが決してうまくいかないように思えた時、遂に私は私自身を笑い、ヒポコンデリーのなしかめっ面を投げ捨てて生きる決意をした」¹⁷⁵⁾ (筆者傍点) とある。

或いは又、『ヴェルター』の草案を練っている頃に「『此の冬はわたしのスケートを楽しもうと思います』と言って彼の好愛する運動をなし得る日を待達おしげに望んでいる如きは、全く本来の青

年ゲ-テに還った事を思わせるものがある。』¹⁷⁶⁾

更には又、あれだけ彼の胸を焦がした筈のシャルロッテ・ブッフの許を去って、マダム・ラ・ロッシュのところへ赴き、『ヴェルター』のロッテのもう一人のモデルであるマクシミリアーネ、「小柄で愛らしく、ヴェツラーの主婦らしい青い眼とは違って、活々とした黒い眼をもつマクシミリアーネ」¹⁷⁷⁾ と出会い、新しい情熱が忽然と湧き上がるのを覚えて、それをゲ-テは『詩と真実』の中で、「古い情熱がまだ完全に消えない先に、私達のうちに新しい情熱が湧き上ろうとするのは、はなはだ快い感情である。それは丁度、日が沈む時に、反対側に月が昇り、二つの天の光輝が交錯し合うのを見るのが喜ばしいと同様である」¹⁷⁸⁾ と表現している。それは我が与謝無村の名句、「菜の花や月は東に日は西に」を連想させる奇妙におおらかな高揚した気分を我々に味わせてくれる。このように不死鳥のように新たにうつぼつと湧き上ってくる生命力、古い情熱は死に、新しい情熱が湧き上ってくる、こういうゲ-テの生命力に、ともすれば羨望しつつ、なじめないものを感じる人もあろうが、ヴェルターの感傷に辟易する我々はほっとするような力強い感動を呼び覚まされる。

若いゲ-テの最も充実した最も空虚な、最も強健にして最も柔弱な情熱の嵐が吹き荒れた時期、自らの運命の見極め難さからくる焦燥感が胸の内に吹き荒れた時期、内からつきあげてくる情熱の衝迫が吹き荒れた時期、彼は時として、その情熱の出口のなさに雷雨の中を山野を歩き回り、わけのわからぬ言葉を吃嗟し、ピンダールの詩を口ずさみ、体を傷つけ、その情熱を疲弊させる以外にほどこしようがなかった時期、その嵐の中を口をついて出てくるわけのわからぬ言葉の中から、あの有名な詩『さすらい人の嵐の歌 (Wandrer's Sturmlied)』が出来たという¹⁷⁹⁾。

又、R. フリーデンタールはこのようなことを報告してくれている、「ベルリンのニコライはハッピー・エンドで終る『ヴェルターの喜び (Werthers Freuden)』を書いた。そしてゲ-テは更に、ヴェルターとロッテが夫婦になるというシーンで彼自身の作品をパロディー化している。自殺者はめくら撃ちをやっただけで、眉毛のところを焦がす。ロッテは主婦らしく頭のへま撃ちをかいがいしく看病する。満足して、二人は手をとりあってベッドへ行く。その後で彼らはアルベルト＝ケストナーをからかう仕末である。ケストナーが幸いにも眼にすることのなかったこの場面は又もや感情の営みに半分しかかかわることのないゲ-テの二重性格をあらわしている。彼はこの本によって、自分の酩酊と陶醉から解放された。一字一句、これを彼の側近が書きとめている」¹⁸⁰⁾ と。

こういうエピソードの数々から、ゲ-テの多面性がよくうかがわれる。ヴェルターの一卵性双生児ともいうべきファウストが生きることに絶望して今まさに毒杯をおおごうとする時、鐘の音と共に、キリストの復活を告げる天使の歌声が聞こえてきて、「この歌のひびきは幼いときから聞き慣れているので、いまもおれを生へと呼びもどす」¹⁸¹⁾ というファウストの述懐は、図々しいまでに力強い生命力の横溢を感じさせて、感動するのは私一人であろうか。若きゲ-テが青春期の最後に執筆に着手した作品『エグモント (Egmont)』の中で主人公が「おれはまだ自分の成長の頂点には達してはいない」¹⁸²⁾ と叫ぶその声の何というたくましさ¹⁸³⁾。

「それぞれの時期にそれぞれの恋人に情熱を捧げ、己れを失うまでに取り乱し、からくも危機を

のりこえ、恋の恐ろしさを肝に銘じながら、しかもくり返し恋におちこんでいった」¹⁸⁴⁾ 人として、殉情の人という視点からのみゲ-テを見るならば、我々はゲ-テを見誤ることになる。確かにゲ-テは一面において殉情の人である。情熱に身を焦がすということを終生繰り返さざるをえなかった殉情の人である。小栗浩氏も言っているように「恋は人の心を弱くする。だからゲ-テは恋に対して警戒的になる。とはいえ、胸のうちが熱くなり、とめどもなく涙があふれ出て、いい知れぬ喜びにひたるのも、恋する者だけに与えられることである。それゆえに彼はあらがひようもなくくり返し恋におちこんでゆく。その喜びの一瞬はどんな苦悩をもつぐなってくれるであろうし、その苦悩でさえ、そのゆえにこそこの世に生きたいと思うものなのである。ゲ-テの生涯はこの恋の喜びと悩みとその克服によって幾重にも織りなされている」¹⁸⁵⁾ しかし「愛する人のために一身をなげうって、などというのははじめからゲ-テの恋ではない」¹⁸⁶⁾ ということも確かな事実であり、重要な点である。ここにゲ-テの愛の至純にみえて、その底にひそむ悪魔的な相貌がある。或いは又、その愛の巨人的であるということの別の意味がある。それ故にただ殉情の人をのみゲ-テに求める人の眼には、ゲ-テは奇怪に映る。それはエゴイスティックなものにも映るかも知れない。しかしそれ以上のものでもあったのではなからうか。より高き境涯を目指し、より高い自己形成を願う善きゲ-ニウス (ein guter Genius) の導きでもなかったのだろうか。しかし彼自身はそういう自らの性向を長く是とも非とも評価しきれず、それをしばしば魔神的なもの (das Dämonische) と呼んで¹⁸⁷⁾ とまどいの表情を見せる。そういう魔神的なものによって、時に「罪なき罪」をつくり、いわれなき非難をこうむらざるをえなかった。しかし晩年、彼はエッカーマン (Johann Peter Eckermann) に言っている、「もしわたしが自分の好きなように振る舞うことがあれば、私自身はおろか、わたしの周囲の人々をまでも破滅におとし入れるようなものが、わたし自身のなかにあったであろう」¹⁸⁸⁾ と述懐している。

これが情熱の嵐なのである。ヴェルターはロッテを所有しない。所有しないことによってヴェルターは滅ぶ。この世の幸福に自己を限定できないヴェルターはそれによって滅ぶ。そこに固有のヴェルターの悲しみがある。ロッテとアルベルトの幸福を目の前にする時も、二人の婚礼の知らせを受ける時も、ヴェルターはつねに第二の位置を占める。この世のものを所有し、そこに踏みとどまりえないファウスト的衝迫がヴェルターの心の底にもひそんでいる。この世のものを所有しえず、そこに踏みとどまりえないヴェルター＝ファウストはそれを捨て、それを踏み越え、それを滅ぼさざるをえない。それをあえてなしえない者の悲しみ、それがファウストにはないヴェルターの心のトーンである。自分のみならず愛する者までも焼き尽くさずにはいない情熱の炎でもってファウストはその一步を踏み出し、出口を求める。ヴェルターは自殺という形でしかそれに出口を与えなかった。魂の閉塞状態を死という形でしか打破しえなかった。そこにまた、時代的な制約、フランス風の古典主義の法則と啓蒙時代の主知主義という桎梏のもとで多く閉塞状況下にあって、呻吟していた同時代の知的青年をあれほど迄に熱狂、共感せしめた原因があるのではなからうか。ヴェルターの悲劇は愛への殉死という形をとっているが、真のヴェルターの悲劇は愛を、情熱を完遂しえずして滅んでゆくところにある。ヴェルターは自らの死を犠牲であるという。それはロッテやアル

ベルトの幸福のための犠牲の謂ではなくして、真実にはむしろそれは情熱の犠牲の謂ではなからうか。自らの情熱の突破を断念することによってヴェルターは滅んでゆかざるをえない。このヴェルター的な情熱のおののき、衝迫、出口を求めて荒れ狂う内面の嵐は、ゲ-テ自身それをいとおしみつつ、終生ゲ-テから去らなかつたのであり、終ることのない衝動でありつづけたのではなからうか。しかしこの衝動に身を焼き尽くす経験なしにはゲ-テの生は遂に完了しない。しかしそれは先のことである。E. シュタイガーは言っている、「生きている限り、愛があらゆる危険に打ち勝ち、もはや確かな返答にも偶然の出会いにも現在の幸福にも左右されないということがどうして可能なのだろうか？ しかしそれについて語るのはまだ早い。何故なら、ここには長く険しい道のりが始まったばかりであり、その最も重要な道程をゲ-テはヴァイマルにおいてやっと歩み終えることになるのだから」¹⁸⁹⁾ と。ゲ-テがこの危機に完全に結着をつけないうまま、ヴェルターは死に、「この脅威する危険を……差しあたり……なんらかの行為によって除去する必要を感じ」¹⁹⁰⁾ ていたゲ-テは、ゲ-テにとって精神的に不毛の地、生地フランクフルトを去って、ヴァイマルへと逃走する。

ヴェルターは自らの閉鎖性の故に滅んでゆく。その閉鎖性を破ってゆくところに再生するファウスト、或いはゲ-テの姿がある。ヴェルター的殉情からくる破滅からゲ-テの身を守ったのはメフィスト的な醒めた眼（それはファウストを自殺から救ったものでもある）、それは又、自己の無限なる形成を見通す眼でもあったのであろう。ホーエンシュタインは又、「ヴェルターは『メフィストフェレス (Mephistopheles)』という心的状態に耐え得ず、また決して己れ自身を笑うことができず、したがって悲劇を喜劇に溶解することができないであろうから、彼は『この世の苦痛』に滅びるのである」¹⁹¹⁾ と言っている。悲劇を喜劇に溶解し、己れ自身を哄笑するようなメフィストがファウスト同様、ヴェルターにも介在するならば、ヴェルターが滅びるといことはなかつたであろう。こう見るならば、永きに亘るゲ-テの自己形成の道程には、ファウストがそうであったようにメフィストが絶えず介在したと言えるのではなからうか。ヘルダー (Johann Gottfried Herder) は若きゲ-テのうわついた軽薄なまでに遠心的な性向を引き締め、その時代の思潮にそまった啓蒙主義的知性、冷たい聡明さを揶揄し、ゲ-テを「君にあっては万事が見るに尽きる (Es ist alles so Blick bei euch,)」¹⁹²⁾ と批判し、若きゲ-テの「見る人」「眼の人」「見るべく生まれた (zum Sehen geboren)」¹⁹³⁾ 人としてのゲ-テから、感ずる人、詩人としてのゲ-テへと、ゲ-テをして目覚めさせたという点で、貢献するところ、多大のものがあつたわけであろうが、この見る人としてのゲ-テをも我々は軽視してはならないのではなからうか。この見る人としてのゲ-テがイェルーザレムの自殺の報に接し、それを自らの内面の象徴としてとらえ、それを『ヴェルター』の中に形象化することによって自らの情熱の通風弁を見出し、とりあえず危機を脱したとも言うことができるのではなからうか。心的体験の定着化、形象化はともかくも情熱の充足実現であり、同時にホーエンシュタインも言うように、「それは愛の死である。」¹⁹⁴⁾ しかし「そこから死せるゲ-テが『ますます新たに』蘇活して高次の存在となるのである。故に『ヴェルターの悩み』はゲ-テ胸奥の決戦の決着にはかならぬ……いわば、この胸の相抗争する情熱を識ることであり、また識ることによってかかる危険な情熱の数々を制縛することにかならない」¹⁹⁵⁾ (筆者傍点) ヴェルターの運

命はゲーテの運命の一つの面であり、可能性の一つではあった。それを形象化、象徴化することによって、自らがそうでありえた運命の一つから彼は離脱するのである。情熱はいまや沈静化し、その魔力を失う。ゲーテの自らの情熱を客体化し、見るという行為によって。

注

日本文の引用文では人名に関して「ゲーテ」「ゲエテ」「ゲョエテ」「ヴェルター」「ヴェールター」「ヴェルテル」「ウェルテル」の如き不統一があるが、原文通りとした。旧仮名づかい、旧漢字は新仮名づかい、当用漢字にそれぞれあらためた。

- 1) グンドルフ著、小口優訳、若きゲーテ、未来社、234頁。
- 2) Richard Friedenthal, Goethe, Sein Leben und seine Zeit, R. Piper & Co. Verlag, München Zürich, 1974, S. 160.
- 3) Johann Peter Eckermann, Gespräche mit Goethe, F. A. Brockhaus·Wiesbaden, 1975, S. 412.
- 4) Goethe, Leben und Welt in Briefen, zusammengestellt von Friedhelm Kemp, Carl Hanser Verlag, München Wien, 1978, S. 610.
- 5) 茅野蕭々著、ゲョエテ研究、東京第一書房、昭和8年、222頁。
- 6) R. Friedenthal, Goethe, Sein Leben und seine Zeit, S. 143.
- 7) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, in Hamburger Ausg. Bd. VI, S. 54, 55.
- 8) *ibid.*, S. 44.
- 9) Albert Bielschowsky, The life of Goethe, Ams Press, New York, 1970, p. 161.
- 10) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 42.
- 11) *ibid.*, S. 75.
- 12) *ibid.*, S. 55.
- 13) *ibid.*, S. 76.
- 14) ブランドス著、栗原佑訳、ゲョエテ研究、改造社、昭和12年、201頁。
- 15) R. Friedenthal, Goethe, Sein Leben und seine Zeit, S. 144.
- 16) A. Bielschowsky, The life of Goethe, p. 163.
- 17) R. Friedenthal, Goethe, Sein Leben und seine Zeit, S. 145.
- 18) cf. A. Bielschowsky, The life of Goethe, p. 165.
- 19) Goethe, Leben und Welt in Briefen, S. 61.
- 20) Vgl. *ibid.*, S. 62.
- 21) 茅野蕭々著、ゲョエテ研究、238頁。
- 22) J. P. Eckermann, Gespräche mit Goethe, S. 412.
- 23) ブランドス著、ゲョエテ研究、193頁。
- 24) 茅野蕭々著、ゲョエテ研究、239頁。
- 25) 小栗浩著、人間ゲーテ、岩波書店、1978、61頁。
- 26) 亀尾英四郎著、ゲエテと独逸精神、起山房、昭和18年、5頁。
- 27) A. Bielschowsky, The life of Goethe, p. 185.
- 28) R. Friedenthal, Goethe, Sein Leben und seine Zeit, S. 148.
- 29) *ibid.*, S. 148.
- 30) Emil Staiger, Goethe 1749-1786, Arthemis Verlag, Zürich und München, 1978, S. 169.
- 31) ブランドス著、ゲョエテ研究、179頁。
- 32) A. Bielschowsky, The life of Goethe, p. 159.

- 33) 茅野蕭々著, ゲョエテ研究, 213頁。
- 34) 同書, 213頁。
- 35) R. Friedenthal, Goethe, Sein Leben und seine Zeit, S. 163.
- 36) 茅野蕭々著, ゲョエテ研究, 213頁。
- 37) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 弘文堂書房, 昭和15年, 581頁。
- 38) cf. A. Bielschowsky, The life of Goethe, p. 158
- 39) E. Staiger, Goethe 1749-1786, S. 161.
- 40) ブランドス著, ゲョエテ研究, 182頁。
- 41) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 550頁。
- 42) 同書, 551頁。
- 43) Goethe, Leben und Welt in Briefen, S. 65, 66.
- 44) 茅野蕭々著, ゲョエテ研究, 210頁。
- 45) 同書, 210頁。
- 46) 同書, 242頁。
- 47) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 553頁。
- 48) 同書, 590頁。
- 49) ブランドス著, ゲョエテ研究, 193頁。
- 50) グンドルフ著, 若きゲーテ, 236, 237頁。
- 51) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 590, 591頁。
- 52) 同書, 591頁。
- 53) R. C. Zimmermann, Das Weltbild des jungen Goethe, zweiter Band, Interpretation und Dokumentation, Wilhelm Fink Verlag, München, 1979, S. 167.
- 54) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 84.
- 55) H. Reiss, Goethes Romane, Francke Verlag, Bern und München, 1963, S. 14.
- 56) *ibid.*, S. 14.
- 57) *ibid.*, S. 66.
- 58) Vgl. *ibid.*, S. 65.
- 59) ブランドス著, ゲョエテ研究, 189頁。
- 60) 同書, 199頁。
- 61) 小栗浩著, 人間ゲーテ, 61, 62頁。
- 62) Vgl. R. Friedenthal, Goethe, Sein Leben und seine Zeit, S. 164
- 63) H. Reiss, Goethes Romane S. 48.
- 64) ブランドス著, ゲョエテ研究, 190頁。
- 65) 66) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 435頁。
- 67) 68) 同書, 570頁。
- 69) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 74.
- 70) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 572頁。
- 71) E. Staiger, Goethe 1749-1786, S. 161.
- 72) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 334頁。
- 73) J. W. Goethe, Gedichte und Epen I, in Hamburger Ausg, Bd. I, S. 31.
- 74) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 8.
- 75) 76) 77) *ibid.*, S. 9.
- 78) 79) *ibid.*, S. 52.
- 80) ブランドス著, ゲョエテ研究, 189頁。
- 81) ホーエンシュタイン著, 斎藤栄治訳, ゲーテ —ピラミッド—, 桜井書店, 昭和21年, 77頁。

- 82) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 10.
- 83) 参照, 木村謹治著, 「若きゲ-テ」研究, 306頁。
- 84) グンドルフ著, 若きゲ-テ, 245頁。
- 85) 前田敬作訳, 若きヴェルテルの悩み, 解説, 昭和45年, 人文書院, 191頁。
- 86) 同書, 190頁。
- 87) グンドルフ著, 若きゲ-テ, 241頁。
- 88) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 13, 14.
- 89) *ibid.*, S. 17.
- 90) 91) 茅野蕭々著, ゲョエテ研究, 242頁。
- 92) R. C. Zimmermann, Das Weltbild des jungen Goethe, zweiter Band, S. 186.
- 93) 94) *ibid.*, S. 185.
- 95) Vgl. H. Reiss, Goethes Romane, S. 22.
- 96) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 8.
- 97) 木村謹治著, 「若きゲ-テ」研究, 553頁。
- 98) E. Staiger, Goethe 1749-1786, S. 158.
- 99) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 62, 63.
- 100), 101) *ibid.*, S. 16.
- 102), 103) R. C. Zimmermann, Das Weltbild des jungen Goethe, zweiter Band, S. 192.
- 104) ホーエンシュタイン著, ゲ-テ ピラミッド一, 139頁。
- 105), 106) H. Reiss, Goethes Romane, S. 47.
- 107) E. Staiger, Goethe 1749-1786, S. 166.
- 108) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 49, 50.
- 109) *ibid.*, S. 48.
- 110) *ibid.*, S. 12.
- 111) ホーエンシュタイン著, ゲ-テ ピラミッド一, 95頁。
- 112), 113) R. C. Zimmermann, Das Weltbild des jungen Goethe, zweiter Band, S. 168.
- 114) J. W. Goethe, Die Leiden des jungen Werther, S. 51.
- 115) *ibid.*, S. 52.
- 116) *ibid.*, S. 83.
- 117) *ibid.*, S. 84, 85.
- 118) *ibid.*, S. 114.
- 119) *ibid.*, S. 53.
- 120) *ibid.*, S. 29.
- 121) *ibid.*, S. 92.
- 122) グンドルフ著, 若きゲ-テ, 245頁。
- 123) J. W. Goethe, Dichtung und Wahrheit, in Hamburger Ausg., Bd. IX, S. 561.
- 124) ホーエンシュタイン著, ゲ-テ ピラミッド一, 96, 97頁。
- 125) 同書, 90頁。
- 126) 木村謹治著, 「若きゲ-テ」研究, 310頁。
- 127) 茅野蕭々著, ゲョエテ研究, 217頁。
- 128) E. Staiger, Goethe 1749-1786, S. 168.
- 129) R. C. Zimmermann, Das Weltbild des jungen Goethe, zweiter Band, S. 190.
- 130) R. C. Zimmermann は Werther の心性を die passive Empfänglichkeit, bloßer passiver Spiegel des Göttlichen (Vgl. R. C. Zimmermann, Das Weltbild des jungen Goethe, S. 197) 等々として規定しているが, Die Leiden des jungen Werther という表題の Leiden が Werther の Passivität をよく表わして

いる。

- 131) R. C. Zimmermann, *Das Weltbild des jungen Goethe*, S. 212.
- 132) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 329頁。
- 133) E. Staiger, *Goethe 1749-1786*, S. 159.
- 134), 135) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 553頁。
- 136) R. C. Zimmermann, *Das Weltbild des jungen Goethe*, zweiter Band, S. 195.
- 137) E. Staiger, *Goethe 1749-1786*, S. 153.
- 138) 茅野蕭々著, *ゲョエテ研究*, 239頁。
- 139) R. Friedenthal, *Goethe, Sein Leben und seine Zeit*, S. 183.
- 140) H. Reiss, *Goethes Romane*, S. 18.
- 141), 142) グンドルフ著, *若きゲーテ*, 245頁。
- 143) J. W. Goethe, *Die Leiden des jungen Werther*, S. 116.
- 144) ホーエンシュタイン著, *ゲーテ —ピラミッド—*, 131頁。
- 145) 同書, 88頁。
- 146) 同書, 89頁。
- 147) J. W. Goethe, *Faust*, in *Hamburger Ausg.*, Bd. III, 1976, S. 110.
- 148) 前田敬作訳, *若きヴェルテルの悩み*, 解説, 191, 192頁。
- 149), 150) ホーエンシュタイン著, *ゲーテ —ピラミッド—*, 139頁。
- 151) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 587頁。
- 152) 同書, 590頁。
- 153) ヴェルターの自殺のモチーフはしばしば「宇宙的に伸張する生命充実と瞬間の諸制限との抗争」(グンドルフ著, *若きゲーテ*, 235頁), 「絶対者の無限と個我の有限との対立」(小栗浩著, *人間ゲーテ*, 63頁) 等々として規定されている。
- 154) J. W. Goethe, *Dichtung und Wahrheit*, S. 585.
- 155) 茅野蕭々著, *ゲョエテ研究*, 245頁。
- 156) A. Bielschowsky, *The life of Goethe*, p. 194, 195.
- 157) 参照, 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 591頁。
- 158) 茅野蕭々著, *ゲョエテ研究*, 245頁。
- 159) グンドルフ著, *若きゲーテ*, 249頁。
- 160), 161) 同書, 250頁。
- 162), 163) R. Friedenthal, *Goethe, Sein Leben und seine Zeit*, S. 164.
- 164) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 380頁。
- 165) A. Bielschowsky, *The life of Goethe*, p. 186.
- 166) H. Reiss, *Goethes Romane*, S. 60.
- 167) *ibid.*, S. 61.
- 168) 茅野蕭々著, *ゲョエテ研究*, 221頁。
- 169) J. W. Goethe, *Die Leiden des jungen Werther*, S. 71.
- 170) *ibid.*, S. 55.
- 171) A. Bielschowsky, *The life of Goethe*, p. 195.
- 172) *Goethe, Leben und Welt in Briefen*, S. 610.
- 173) 茅野蕭々著, *ゲョエテ研究*, 242頁。
- 174) *Goethe, Leben und Welt in Briefen*, S. 58.
- 175) J. W. Goethe, *Dichtung und Wahrheit*, S. 585.
- 176) 木村謹治著, 「若きゲーテ」研究, 369頁。
- 177) R. Friedenthal, *Goethe, Sein Leben und seine Zeit*, S. 147.

- 178) J. W. Goethe, *Dichtung und Wahrheit*, S. 561, 562.
- 179) 参照, 木村謹治著, 「若きゲ-テ」研究, 252頁。
- 180) R. Friedenthal, *Goethe, Sein Leben und seine Zeit*, S. 161.
- 181) J. W. Goethe, *Faust*, S. 31.
- 182) J. W. Goethe, *Egmont*, in *Hamburger Ausg.*, Bd. IV 1974, S. 401.
- 183) E. シュタイガーはゲ-テとの相違を念頭に置きつつ, ヴェルターを次のように総括している。即ち, 「彼(ヴェルター)は余りにも性急に『嵐の歌(Sturmlied)』の旅人にも以て, 神的な瞬間をしっかりとつかもうと渴望する。しかしその旅人のたくましい憤怒も彼にはなく, またたとえ彼が御者クロノスの旅の客に近い存在であるにしても, 少々のは笑って耐えていこうとする軽快さも彼には欠けている。そして成熟したゲ-テの自足せる言葉「諦念(Entsagen)」もまた彼には遠い。瞬間がその恵みを彼に拒否する時, 彼にはもうどこにも逃げ道がない」(E. Staiger, *Goethe 1749-1786*, S. 173) と。
- 184) 小栗浩著, 人間ゲ-テ, 32頁。
- 185) 同書, 35頁。
- 186) 同書, 47頁。
- 187) 参照, 同書47頁。
- 188) J. P. Eckermann, *Gespräche mit Goethe*, S. 308.
- 189) E. Staiger, *Goethe 1749-1786*, S. 169.
- 190) ホーエンシュタイン著, ゲ-テ ―ピラミッド―, 154頁。
- 191) 同書, 133頁。
- 192) *Goethe, Leben und Welt in Briefen*, S. 54.
- 193) 参照, 下村寅太郎, ゲ-テとレオナルド・ダ・ヴィンチ, ゲ-テ年鑑第18巻, 社会法人日本ゲ-テ協会, 1976, 1頁。
- 194), 195) ホーエンシュタイン著, ゲ-テ ―ピラミッド―, 136頁。